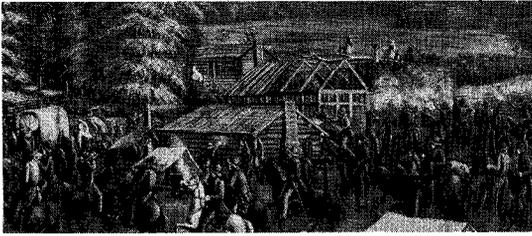




聖徒の道

4 1979



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
ヒュー・W・ピノック

教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

赤松成次郎 (翻訳部長)

も く じ

きょう、選びなさい	マリオン・G・ロムニー	1
日の光栄の結婚	ブルース・R・マッコンキー	5
日々の恵み	ジャン・ムスマン	8
不貞の警戒信号	ベオン・G・スミス	11
季節季節に雨を	デビッド・カール・ダニエルソン	16
大管長の優しさ	フェレン・L・クリステンセン	18
質疑応答	ジェラルド・E・ジョーンズ	19
奇跡の朝		21
メアリーの信仰		24
あなたが幸せなら	キム・ロダー	26
どのどうぶつのおしあとかな?		28
人生の修理	ロナルド・カービー	29
ある聖餐会での話	アニヤ・ベイトマン	30
勝利と悲劇	グレン・M・レオナード	34
ローカル・ニュース		42

聖徒の道 4月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
印刷所 株式会社 精興社
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

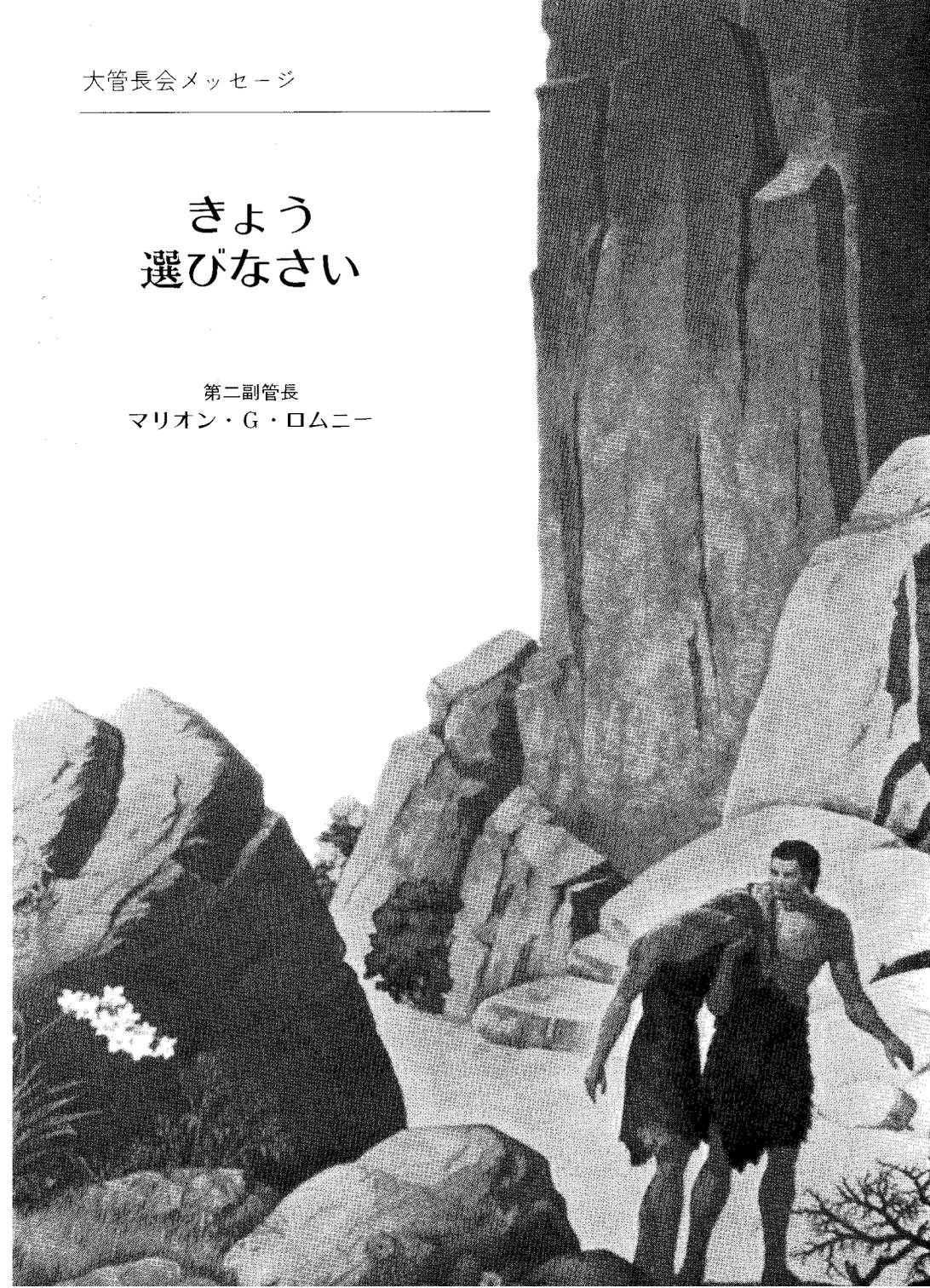
INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA0562JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 ^{まっじつ}末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

きょう 選びなさい

第二副管長
マリオン・G・ロムニー



「**あ** なたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」(ヨシュア24:15)

今月号のメッセージで私が皆さんにお伝えしたいことは、この人生は決断の生涯であり、いつかは終わるものであるということである。したがって、私たちは正しい選択をしなればならない。しかも今それを行なわなければならない。

地球が創造され、人がこの地上に置かれたのはそのためであった。

人は神の霊の子供であり、永遠の存在である。人はこの地球が創造される前に、霊界で神の子として生まれ、神と共にそこに住んでいた。そして、人は、肉体の死後も永遠に生き続けるのである。

私たちは創造主から自由意志を授かっている。この地上にいる間、私たちはふたつの大きな力、すなわち善の力と悪の力の間で生活している。私たちはこのふたつのどちらかを選ばなければならない。決してこの選択を避けることはできないのである。

キリストのみたまは「世に来るあらゆる人々に光を与え、また『みたま』はその声を聴く全世界のあらゆる人々を照すなり。

この『みたま』の声を聴くすべての人は神……すなわち、御父の許に来るなり。」(教義と聖約84:46—47)。

また、自己の責任を知り得る年齢に達したすべての人は、悪魔とその使いに誘惑され、キリストのみたまの導きを拒んで彼らに従うか否かを試みられる。

この戦いはエデンの園に始まり、今も激しい争いが続いている。

アダムとイヴはエデンの園を追い出された後、天の使いから福音を教わり、また主から子供たちを教えるようにと命じられた。そし

てふたりはこの戒めに従った。そこに「サタン彼らの中に来りて言いけるは、……アダムとイヴの言を信ずるなかれ、と。されば、彼らアダムとイヴの言を信ずることなくサタンを神よりも愛でたり。人はその時より、肉体、肉欲、悪魔に従う者となり始めたり。」(モーセ5:13)

同じことがこれまで約6,000年の間繰り返して行なわれてきた。それぞれの神権時代に人人は福音を拒み、その結果、背教、墮落、暗黒の世界へと落ちていったのである。そのたびに、神会すなわち御父と御子と聖霊についての真の属性が明らかにされてきた。そして、福音の基本原則と儀式も新たに啓示され、福音の教えに従って生活することの大切さが強調されてきた。

また、福音の教えに従う時にどのような祝福が与えられるかも明らかにされ、不従順のもたらす結果についても常に予告されてきた。そしてそれらの予言は必ず成就している。

人類の歴史の中で、「『みたま』の声」を聴き続けてきたひとつの社会がある。彼らはただの一度たりともサタンの誘惑や力に屈しなかった。エノクの民と呼ばれているのがその人々である。彼らは天にとり上げられた。そして今、再びこの地上に帰り来て、ひとつになる日を待っている。

人類の歴史が始まってから最初の16世紀半の間、地上の残りの住民は福音を教えられ、アダム、セツ、エノス、カイナン、マハラレル、ヤレド、エノク、メトセラ、レメク、ノアなどの予言者から、従順である時に与えられる祝福と不従順の結果もたらされる滅亡を知らされていた。しかし、彼らはこれらの子言者の声を聴かず、「信ずるなかれ」というサタンの言葉に従ったため、最後には罪惡の極みに達し、洪水を招く結果となったのである。

そして、ノアとノアの家族だけが生き残った。

間違った選択をしたために同じような結果に陥った例が、巨大なバベルの塔を建てた後、約2,000年間アメリカ大陸に住んでいたジェレド人の記録にも見られる。

バベルの塔を建てたことで言葉を乱されてから、主は一群の人々をアメリカ大陸に導かれた。そして、イエス・キリストはこの地の神であるご自分に従うならば偉大な国民になると彼らに言われた。「全世界の中、……汝らの……国民に勝る国民はなかるべし。」(イテール1:43)そして実際に彼らはその通りになった。

しかし繁栄し豊かになってくると、彼らは主を忘れ、その教えをなおざりにした。そして民の罪悪が頂点に達した時、予言者たちは悔い改めて主に仕えなければこの地から滅ぼし去られると繰り返し民に警告した。けれども彼らは予言者の警告を拒み、肉欲の道から離れなかった。ついに、同胞相争う大戦争になり、ことごとく滅びてしまったのである。

その後アメリカ大陸はニーファイ人によって引き継がれた。ニーファイ人は紀元前600年頃、主に導かれてアメリカに渡ってきたリ－ハイの子孫である。キリストがお生まれになるまでの600年間、ニーファイ人は予言者たちから、キリストの教えに従って生活する時に与えられる祝福と教えに従わない時に起こる滅亡について繰り返し教えられていた。しかしながら紀元421年頃、民の罪悪は頂点に達し、ジェレド人と同じように破滅の道をたどったのである。

ニーファイ人は1千年の間、ある時は義しく、またある時は邪悪な生活を送った。

ニーファイ人の予言者たちは、キリストが

エルサレムの地で伝道されることや、キリストの降誕と十字架上の死について知らされること、そしてキリストは復活した後アメリカ大陸の民を訪れたもうということについて告げた。

予言者ニーファイは紀元前592年に、キリストが十字架にかけられる時、「地(アメリカ大陸)の面に暗黒……電光……雷……地震があり……、多くの都市が陥ち込み、多くの都市が焼け失せ」ること、そしてその大破壊に続いて復活したキリストが人々に現われたもうということを予言している。(Iニーファイ12:4, 6参照)

この予言は文字通り成就した。

予言はすべて主が定められた時が来れば成就するからである。

予言者アモスはこれが真実であることを次のように述べている。

「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事もなされない。」(アモス3:7)

ところで、これまで見てきた出来事はアモスの言葉が真実であることを立証している。しかもそれらは、私の話の裏付けとなり、さらに現在の状況の中で私が語ることに深い意味を添え、キリストの光に従うことの大切さを改めて認識させてくれる。

私たちは今、時満ちたる神権時代、福千年に先立つ福音の最後の神権時代に生きている。

この神権時代は、かつての神権時代のように、背教によって福音が失われるという形で終わることはない。時満ちたる神権時代は、この世が創造されて以来すべての神権時代において予言されてきたように、主なるイエス・キリストが再臨し、1千年にわたる平和な統治に入られる時に幕を閉じるのである。

「かの大いなる『福千年』は来らん。その

時サタンは縛られん。」(教義と聖約43:30—31)

キリストは「能力^{ちから}と大いなる栄光とを以て天の万群と共に天より現われ、人々と共に正義を以て一千年の間この世に留まり悪しき人人はこれに耐えざればなり。」(教義と聖約29:11)

ニーファイは私たちの時代を予見して、次のように記している。

「サタンがもはや人の心を司どることのできない日が速にくる。すべてたかぶる者と悪を行う者がわらようになって焼かれる日がじきにくるからである。

神は悪人が義人を亡ぼすのを許したまわなから、あらゆる人が神のはげしい怒り^{こらえ}を蒙る日がじにくる。

それであるから、神がそのはげしい怒りを下したまま義人たちを守るために火をもってその敵を亡ぼさねばならなくとも神はその能力で必ず義人たちを守りたもう。故に義人はおそれるに及ばない、予言者の言葉に『たとえ火の力を以てするに至るともかれらは救われるべし』とあるからである。

ごらん私の兄弟たちよ。これらのことは間もなく必ず起る。真に血も火も烟の霧も必ずくる。しかもこれらのことはこの世界の上で起るに相違なく、すべての人間がイスラエルの聖者に対してその心をかたくなにするならば、肉体をもつこの世の人間にくるのである。

ごらん、義人たちは亡びない。シオンに敵対して戦う者たちがすべて絶ち亡ぼされる時が確にくるに相違ないからである。」(Iニーファイ22:15—19)

いつこのようなことが起こるか私たちには分からない。しかしその時が近いことは確かである。世の人々の罪悪は頂点に達しつつある。十戒の中のどの戒めをとってみても軽ん

じられていないものはないほどである。人々は神を神とも思わず、不正直や不道徳、安息日を破ること、果ては殺人までも増加の一途をたどっている。

この最後の神権時代の幕開けに主は何と言われただろうか。

「聴け、汝らわが教会の人々よ。いと高きところに住みて、すべての人を見まもる者の声は告ぐ。曰く、誠にわれ告ぐ、汝ら民よ、遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ、共に聴け。……

汝ら備えをなせ、まさに来るべき事のために備えをなせ、そは主の来るは近ければなり、而して主の怒りは燃え、主の剣は天にてうるおいたれば、今やこの世に住む人々の頭^{こぶせ}に下されん。

その時主の腕^{かひな}現われて、主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず、予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる者のその民の中より絶たるべき日来るなり。

そは彼らわが儀式より離れ去り、わが永遠の誓約を破りたればなり。

彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども、その姿は人の世の像^{かたち}にしてその本質は一個の偶像なり。そは古びてついにバビロンにて、すなわちついに亡ぶべき大バビロンにて朽ちん。」(教義と聖約1:1, 12—16)

時は差し迫っている。バビロンが朽ちる時耐えるためには、私たちは、今選ばなければならない。アミュレクが言っているように、「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。」(アルマ34:32)

私たちは「きょう」正しい選択をしななければならない。

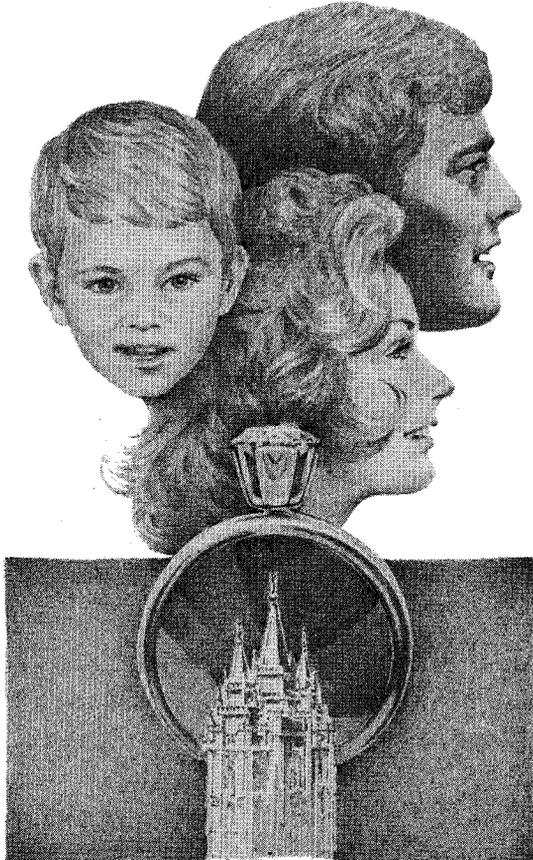
日の光栄の結婚

(その1)

十二使徒評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー

私 たちが思いにおいて一致し、同じ基の上
に立ち、同一の永遠の真理を心に抱くこ
とができるように、幾つかの啓示を引用しな
がらこの話をしたいと思う。また、私たちが

この偉大な教義の原則に関して思いと行ない
をひとつにし、この試しの世を経て御父の王
国に属する完き栄光を受け継ぐために、必要
なことをすべて行なおうとしっかり決意する



ことができるよう祈っている。「教会の律法」といわれる教義と聖約第42章にはこう記されている。「汝ら誠心を以て妻を愛してこれと結び合うべし。その他の者に愛着することなかれ。」(教義と聖約42:22) 同じ精神が旧約聖書のルツ記にもうかがえる。この聖句は、もともと結婚について述べた聖句ではないが、そのまま応用できる原則が示されている。

「ルツは言った、『あなたを捨て、あなたを離れて帰ることをわたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き、またあなたの宿られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。」

あなたの死なれる所でわたしも死んで、そのかたわらに葬られます。もし死に別れでなく、わたしがあなたと別れるならば、主よ、どうぞわたしをいくえにも罰してください。」(ルツ1:16-17)

また、教義と聖約第49章には、この神権時代の結婚について次のように勧告されている。

「また、われ誠に汝らに告ぐ、何人にも結婚を禁ずる者は神より聖職の按手任命を受けたる者にあらず、そは結婚は神の人に定めたる所なればなり。」

この故に、人々各一人の妻を有つことは義し。而してこの二人の者一体となるべし。すべてこれは、この世の造られたる目的に適合したるためなり。

すなわち、この世のいまだ創られざる前に人の創られしに従いて、人間の数のこの世に充たされんためなり。」(教義と聖約49:15-17)

末日聖徒の結婚は、神聖な、日の光栄の秩序に基づくものである。私たちが語る結婚

は、人類にもたらされる最高の愛と喜び、平安、幸福、安らぎを育むことのできる制度である。私たちが築く家庭は、永遠に限りなく存続する可能性を持ち、夫と妻が永遠の関係を保つ所である。その中で両親と息子、娘は決して断ち切ることのできない永遠の絆によって結ばれる。この家族単位は教会よりも大切であり、地上であると天上であると問わずあらゆる組織の中で最も重要な組織である。しかも、その組織を通して、私たちは天父なる神が送っておられる生活、すなわち永遠の生命に至ることができるのである。

この栄えある最後の福音の神権時代において、私たちは最も基本的な永遠の真理、すなわち神がどのような属性をもった御方であるかということに関する真理を知ることができた。永遠の生命とは、御父と御子について知ることである。(ヨハネ17:3参照) 私たちは神がどのような属性をもち、どのような御方であるかを知らなければ、段階を追って昇栄に近づくことはできないのである。永遠の生命とはとりもなおさず父なる神が送っておられる生活のことであり、また父なる神とは聖なる完全な御方で高められ昇栄を受けられた御方である。父なる神は、「人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体を有し」(教義と聖約130:22)、感情、感覚を持ちたもう御方であり、あらゆる人々の霊の父である。私たちは皆、御父の家族の一員として生まれた。私たちは父なる神のみ顔を拝し、そのみ声を聞き、代表者や代理人を通してだけでなく、直接にその勧告を受けた。前世で私たちは御父のことを知っていた。しかし、今は幕が下ろされ、当時のことは何ひとつ記憶していない。そのため私たちは神のようになる方法を

自分で探し求めて行なわなければならなくなつた。

神は私たちを霊の子供としてもうけた後、選択する力を具えた自由意志を与えて下さった。そして律法を授け、自由に行動できるようにし、その結果として私たちが才能や能力、特質を伸ばせるようにして下さった。神はまた救いの計画を定められた。これは神の福音と呼ばれる。この福音は、私たち神の霊の息子、娘が前世における低い英知を持った霊の状態から、神のような高い、昇栄した状態に至るために必要な律法や権威、権利、経験、賜、恵みのすべてから成るものである。

予言者ジョセフ・スミスは、神ご自身が霊と栄光のただ中であって、私たちが進歩し、神のようになるために必要な諸々の律法を定めて下さったと述べている。これらの律法に基づいて神はこの地球を創造し、私たちが死すべき体を得て、この試しの世で試みに遭い、他の方法では得ることのできない経験を得られるようにして下さった。さらに、善悪を識別し、善事か悪事かを選び、霊にかかわる事柄にあって進歩成長する機会を与えて下さった。そして、永遠に続く可能性のある結婚生活を営む機会を与えて下さった。私たちがこの道を前世で選んだ。そして今、最後のテストを受けているのである。これはまた、私たちの前途に横たわる王国に入るための試験でもある。

父なる神が送っておられる生活、すなわち永遠の生命にはふたつの意味がある。第一に家族が永遠に続くこと、そして次に聖典で言われている御父の無上完全と栄光を受けること（教義と聖約76：56参照）、すなわち神ご自身が持つておられる権能、力、支配、昇栄を

受けることである。この限りある世界に住む私たちには、御父が全知全能であることを理解する力はない。もちろん天界の星を見たり、この宇宙に創造された世界や天体を見ることはできる。また、私たちがよく知っているこの天体のすべての生命を調べ、栄えある無限の英知とはどういうものかを知ることはできる。そしてこの英知こそ、万物が創造された源であり、御父の完き栄光を鮮やかに描き出すものであることに気付くのである。

私たちは永遠の生命を求めている。言い換えると、私たちは神の子供として進歩する特権を与えられ、やがて永遠の御父に似た者となる道を歩んでいるのである。もしそうであるとすれば、私たちは主イエスの贖いの犠牲を基としてその上に立つようにと命令を受けているのである。私たちは栄光と誉れを刈り取るために、戒めを守り、義の種を蒔く必要がある。福音の求めるすべてのことを行なうならば、私たちはそのような進歩を遂げることができるのである。この福音すなわち救いの計画は、無限無窮の贖いの犠牲によって、御父の計画のすべての条件と条項を満たして下さったイエス・キリストを記念して、現在はイエス・キリストの福音と呼ばれている。

父なる神は万物の創造主である。したがって私たちは、人間だけでなく諸天の万物を創造して下さった神の聖なるみ名に栄光を帰し、神を讃美する。まさしく父なる神は完全無欠な創造主であり、その御子イエス・キリストは贖い主である。イエス・キリストがこの世に来られたのは、アダムの咎によってこの世にもたらされた肉体と霊の死から私たちを贖うためである。肉体の死が贖われることによって、私たちは皆、不死不滅の体を得られる

日に9箱のタバコを、 一体どうしたら やめられるでしょうか

ジャン・ムスマン

今 振り返ってみますと、1964年に私たちの家を訪問して下さったふたりの立派な宣教師に、福音を信じますと言っていたらどんなによかったかと思えます。あの年、私たちは、宣教師からタバコをやめて下さいと言われてきました。けれども、1時間さえタバコなしであることを苦痛に感じた私たちは、手の届かない所に救いを追いやってしまったのです。

当時、ビルは1日に6箱、私は3箱、タバコを吸っていました。日に9箱という途方もない数のタバコが、私たちと福音の間に立ちはだかっていたのです。しかし、天父は少しずつ私たちの生活を変えて下さいました。そして、1975年に、私たちはバプテスマを受けることができました。

私たちはどうしてもこの喫煙の習慣を断たなければならない羽目に陥りました。というのは、ビルは人の倍ほどタバコを吸っていて平気でしたが、私の方が耐えがたい苦痛に見舞われるようになったからでした。胸がひど

よくなった。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」(Iコリント15:22)このようにして、命あるものは皆やがて復活して不死不滅の状態となり、この世でなした行ないに応じて裁きを受け、備えられた王国で住むべき所を与えられるのである。ある人々は復活して不死不滅の状態となり、神が送っておられる生活すなわち永遠の生命を得る。

主イエス・キリストが私たちのためになして下さったすべての事柄を考え、私たちの悔い改めに応じて罪の責任を引き受けて下さることに對して、私たちは主イエスすなわちエホバのみ名をいくらたたえてもこれで十分ということはない。父なる神は創造のみ業に携わり、御子イエス・キリストは贖いのみ業に従事された。そして、私たち人間は、父なる神が定め、御子イエス・キリストが設けられた基の上に立って、これまで私が述べてきた栄光と誉れと尊厳を受け継ぐことができるように割り当てられた責任を果たすのである。一般的な言葉で言えば、律法を受け入れ、信じるということである。キリストを信じ、その律法に従って生活し、高潔で清い人間になることであり、バプテスマの水に入って罪を洗い流し、聖霊の力によって新しく生まれ変わり、真理と正義の道を歩むことである。

一般的な話で終始してきたが、今回は、次回に詳しく述べる「永遠の結婚」の前置きとして基本的なことを語ってきたつもりである。

く痛むようになったのです。そこで、友達が診ていただいてタバコの本数を減らすことができたという医者を訪ねて行き、私も計画的にタバコを少なくしようと思いました。私が看護婦に案内されて診察室へ入ると、先生はちょうど、私の胸部のレントゲン写真を見ていました。

先生はレントゲン写真をのぞきこんだまま、私にこう尋ねました。「ムスマンさん、今タバコをお持ちですか。」

「はい、2箱ほど。」私は小声で答えました。

すると先生は顔をあげ、私の方を向いて厳しい声で言いました。「どうぞ、このごみ箱に捨ててください。私は医師として、これ以上喫煙すれば、肺がだめになることをご忠告しておきます。」

「でも、先生。私は本数を減らすためにうかがったのです。」

「タバコは今後一切だめです。これが診察の結果です。」そして、さらに語調を強めてこう言いました。「これは重大なことです。もしご主人やお子さんのことを考える気持ちがありなら、今後一切吸ってはなりません。」

帰宅する途中の車の中で、目から涙があふれ出てきました。「タバコをやめるなんて、できない。自分が一番よく知っている。」これまで何度やめようとしたか分かりません。ちょうどビルが出張して留守であったのが、何よりの救いでした。とにかく考える時間が欲しかったのです。家に着くと、私は台所の椅子に腰かけ、どうしたらよいか考えました。そうしているうちにも、無意識のうちに、私は

タバコに火を付けていました。そのことに気付いてふとわれに返った途端に、電話のベルがけたたましく鳴りました。ニューヨークのビルからの電話でした。

「ジャン、今医者に電話したんだけど……」と言って、私がタバコを吸っているのをうかがうかのように黙ってしまいました。そして突然大声でこう言いました。「ジャン・ムスマン、君は今、タバコを吸ってるね！」

「ジャン・ムスマン。君は今、タバコを吸ってるね。タバコを吸ってるね！」私は皮肉たっぷりにビルの言葉をまねました。「ビル・ムスマンさん、まったく結構な身分ですね。あなたにタバコをやめなさいなんて、どなたもおっしゃらないでしょうからね。」

それからふたり共、黙り込んでしまいました。しばらくしてビルが口を切りました。「明日帰るよ。ふたりでタバコを捨てて、24時間禁煙してみよう。」

私は賛成しました。今でもどうしてできたのか分かりませんが、とにかく私はその約束を果たしました。翌日、ビルが帰ってくるなり、両手を大きく広げて、次のように言ったことを今でもはっきり覚えています。「ふたりで力を合わせてタバコをやめよう。もうタバコとは縁を切ろう。」

初めの数週間は大変などというものではなく、まさに恐ろしいほどの毎日でした。ふたりは手を震わせながら、うつろな目で歩き回っていました。いらいらして怒りっぽくなり、私は何度もうだめだと思いました。しかし、ビルは半ば放心状態の中でも頑強に意志を守

り通し、耐えています。そんな彼を見ると、勇気がよみがえってくるのでした。

しかし、ニコチン中毒の状態から抜け出すのは、並大抵のことではありません。ただ「神はなんでもできる」(マルコ10:27)という言葉にかけてみるしかなかったのです。実のところ、自分たちはタバコとの腐れ縁を断ち切って自由の身になれたと感じられるまでに、2年ほどかかりました。

それ自体が奇跡であり、十分な報いでした。しかし祝福はそれだけではありませんでした。この2年間ほど、ふたりの間だけでなく、天父に対しても愛と感謝の気持ちが高まったことはありませんでした。私たちは肉体的にも霊的にも健全になりました。しかも、「ふたり一緒に」そうなることができたのです。そして、心の一致が生まれたことが私たち夫婦にとって最大の祝福でした。本当にありがたいと思います。それだけではありません。タバコをやめるには、その前にすっかり習慣になってしまっている茶やコーヒーをまずやめなければならないと思いました。そしてその余勢を駆ってアルコールに挑戦することができたのです。

しかし、そのような欲望に打ち勝つことによって得た満足感にも増してうれしかったのは、ふたりの子供たちが共に私たちのために祈ってくれたことでした。また、ビルとアンがタバコやアルコールや麻薬の道に入らずにすんだのも、このような私たちの問題を知り、祈っていたからだと思います。祈りのお陰で彼らも天父に近い生活ができていたからです。

そんなわけで、子供たちは彼らの友達と比べるとどこか違っていました。あまり違うので、信念や生活様式が同じ友達をどこで見付けるのかと、こちらの方が心配するほどでした。

子供たちが大きくなっていくにつれ、彼らの将来のことが気懸りになり、私は助けを求めてしばしば主に祈りました。そして、あれは1973年の初め頃だったと思います。私は、3日間にわたってかなりの長い時間、天父に導きを求めました。何らかのしるしを願って求めたのです。そして3日目に、玄関のベルが鳴りふたりのモルモン宣教師が、訪れてきました。私が待ってましたとばかりに中に入れたので、宣教師たちは驚いた様子でした。

これが、福音を受け入れる第2のチャンスでした。しかもこのたびは、準備ができていました。こうして家族4人は、1975年5月の美しい日にバプテスマを受けました。

変化はバプテスマの後も続きました。末日聖徒ならだれでも経験するような、天父に近くなることによってもたらされる変化です。あれから3年たった今、私たちはあらゆる機会をとらえて、教会をどんなに愛しているか、また召しをどんなに大切にしているか、そして互いに永遠の家族としてどんなに愛し合っているかを人々に喜んで伝えられるようになったのです。

ジャン・ムスマン 2児の母親、現在カリフォルニア州パシフィックステークス部バーリングームワード部扶助協会の教養教師の責任にあ



不貞の警戒信号

ペオン・G・スミス

ハ ロルド・B・リー大管長は、死去される
すぐ前の総大会で教会の兄弟たちに、「純
潔の律法を守ろうという決意を新たに」する
よう呼びかけた。リー大管長は神殿結婚をし
た人々からの「結び固めの取消し願ひ」が増
加していることを指摘し、「多くは殺人に次ぐ
大罪、すなわち姦淫の罪に端を発して」いる
と言明している。（「大会報告」1973—75年、
p. 122参照）

神殿結婚をしていながら、姦淫によって結
び固めの誓約を破る人々には、胸を引き裂く
ような苦悩と離婚のほかは何が起こるだろう
か。

問題の原因は非常に複雑、巧妙である。す
ぐに姦淫に陥るのではなく、まず思いから始
まる。姦淫への階段は短く、一段一段が上り
やすい。しかも、ひとたび上りかけると、立
ち止まるのが難しい。

カウンセラーたちは、不貞の「警戒信号」、
すなわちすべての夫婦が気を付け、近寄らな

いようにすべき幾つかのしるしがあることを指摘している。

ひとりの男性を仮にウイラードと呼ぼう。彼は妻以外の女性たちに心が引かれる自分を心配してカウンセリングにやって来た。彼と妻のウィルマは神殿で結婚し、一見、幸福な結婚生活を営んでいるようであった。しかし、ウイラードはその生活に退屈し始めていた。胸の高鳴ることはなく、満たされない気持ちであった。交わす会話も何となくよそよそしく、意味のないことばかりである。ウィルマももう夫に関心を失っていたようであった。彼が特に怖れたのは、一度会社の女性にうわついた気持ちを抱き、軽い気持ちでキスをしたことがあったということである。それが神殿の誓約をも危険にさらしかねないことを、彼はだれよりも感じていた。

ウイラードは、現代の結婚をむしばむ3つの誤った教への犠牲者である。そのひとつは、「神殿で結婚すれば、もうその結婚は大丈夫だ」という考えである。しかし、実際はそうでない。結婚は成長し、変化してゆくふたりの間の生きた交わりであり、結婚生活を密接な意義あるものとするためには、その交わりの質をどう高めてゆかにかにいつも関心を払い続けなければならない。神殿結婚が即、日の光栄の結婚、あるいは幸せな結婚を保証するものではないのである。

第2は、「結婚生活がうまくゆかなければやり直せばよい」という考え方である。成功は即座に得られるものではない。言うなれば、結婚はその過程であって、最終段階ではないのである。したがって、これこれの点では人よりもうまくやっている、ただそれだけのものではしかない。多くの人々は結婚生活のあらゆる面で即座の成功を望み、あるいは期待する。そのため何かの点で足りないところ

があれば、途端に落胆して、「結婚相手を間違えた」と考えるのである。このような態度がえてして、配偶者以外の人に関心を向けさせるのである。

第3は、「伴侶を愛していれば、それ以外の人を愛するはずがない」という考えである。すべての既婚者の務めは、ただひとり、配偶者に誠実で、貞節を守ることである。配偶者に抱くのと同じ愛情を他の人に感じたり、表現したりするのはよくないことである。



分かち合い
の
気持が
ない



関心が
ない



結婚生活が
退屈に
感じられる

職場や社会、教会の責任など、様々な場で男女が一緒になるが、他人に情が移るのはそのような時であろう。男性も女性も結婚の誓約をしっかりと心に留めて、貞節を守ることを決心しなければならない。

不貞と同じように貞節もひとつの過程である。貞節という特質は、夫婦の間の誠実、忠誠、献身の程度ではかられる。一方、不貞は、誠実や忠誠の欠如から生じる。他人との正しくない関係を招く行為は、いずれも貞節をむしばむものである。

結婚によって結ばれたふたりが霊的にも物理的にも一致するためには、感情を言葉で表現し、互いに尊敬し合い、思いやりを示し合うことによって友情と愛と誠意を絶えず増し加えるようにしなければならない。

貞節が不注意やつまらないことでむしばまれてゆく例を、ふたつご紹介しよう。

1. ミルドレッドとマービンの結婚生活は大した問題もなく、安定していた。ミルドレッドは毎日、友人のヘンリーの車に同乗して会社に通っていた。ふたりの会話はいつも楽しかった。特にミルドレッドは、夫のマービンが口数少なく、自分の考えや感情をめったに表に出さないの、ヘンリーと話すのを楽しみにしていた。そうするうちに、ふたりは遠回りをするようになり、やがて車を止めて話し込むようになった。別にふたりの間にはやましいことは何もなかったが、それを知ったマービンはミルドレッドを疑うようになった。そのために彼らの心の痛手を癒すのに数カ月もかかった。もし彼らがほかの人をもうひとり加えるか、通勤方法を変えるかしていたら、避けられた問題である。

たとえ「何事もなかった」としても、このことには見過ごしにできない重大な問題が潜んでいる。貞節から不貞へ移っていく時の巧

妙さは、昼から夜へと闇が広がっていく時の状態に似ている。ミルドレッドとヘンリーと一緒に過ごす時間を楽しみにするようになったことにより、両方の家庭生活が危機に傾いたのである。

2. アルビンはアリスとの結婚後も、独身の友人たちと、ゴルフや狩猟や仕事の話に多くの時間を割いていた。アリスは自分からがみがみ言うのがいやで、不満をじっと胸にしまっていた。アルビンが自分の経験や喜びを語る相手は、いつもアリスではなく、友人たちであった。

ここに最初の危険信号、すなわち意思の疎通の欠如が見られる。一方アリスも、アルビンと同じようにほかの人に心が傾いてゆき、近所の男性と親しくなって、間もなく、友情から深刻な問題へと発展してしまった。

アリスもアルビンもなかなか問題解決の糸口をつかむことができなかった。ふたりは自分たちの目標を再検討し、悔い改め、互いに赦し合うことが必要であった。ふたり共、心の欲求を満たしてくれる相手を伴侶以外に求めるという過ちを犯したのである。だれも欲求を満足させてくれることを伴侶に期待することはできないが情緒的に満たされていない環境のもとで結婚生活を続けていくこともできないのである。

不義によってもたらされる最も顕著なものに信頼感の喪失がある。また不在の理由がはっきりしないことから起こる疑惑や不安で確信がないためにかえって所有欲が強まり、男性あるいは女性としての自分に迷いが生じてくる。さらに誓約を破ったことの罪悪感や情緒不安のために、仕事や子供たちとの交わり、日常の責任を果たすことができなくなってくる。

特に親の不貞によって苦しむのは子供であ

る。どの子供も両親の関係には敏感であり、親が心の中で感じていることを隠そうとしてもなかなか隠しおこせるものではない。10歳を越える子供ならば、何かおかしいと感じて動揺するか、責任を感じたり、家庭の中に前向きな心のつながりががないために情緒的な問題を引き起こしたりすることがあるかもしれない。学齢前の子供でも、両親が愛し合っていないことを感じて自分自身と家庭内での自分の身の置き所に戸惑うであろう。不貞の程度はどうであれ子供に必ず飛び火し、子供自身や両親に対する考え方、ひいては愛情や結婚といった問題にまで影響を及ぼす。親の不義は後年、必ず結婚してからの子供の生活に影響してくる。

大半の病気がそうであるように、不貞も治療よりも予防の方が容易である。最良の予防法は良い結婚生活を築き上げる努力をすることである。そういう意味で、結婚を永遠のものにするという固い決意の下に行なわれる神殿結婚ほど堅固な土台はない。そこには伴侶だけではなく、神が定められた結婚という制度そのものに対する強い決心がある。しかもその決心は伴侶に対すると同じように天父に対しても貞節であることを必要とするものである。

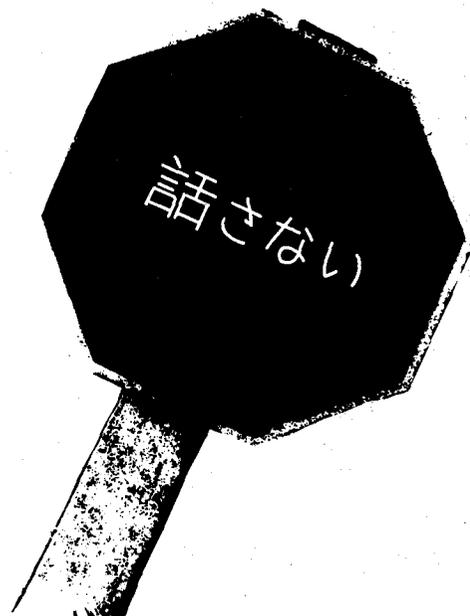
相互信頼は、結婚に必須のものである。伴侶を「愛してこれと結び合」い、「その他の者に愛着」しないことが堅実な結婚生活を営む鍵となる。(教義と聖約42:22参照)

貞節を育む別の要素として、正直なコミュニケーションがある。自分たち夫婦に関する事柄を何でも進んで話し合うという態度である。自分の考えやその日経験したことを話し合うと親密さが増し、自然に誠実な行動が取れるようになる。不満や倦怠感やいらいらした気持ちは、注意しなければならぬ危険信

号である。

次の4つの質問は、あなたの結婚生活の貞節度を調べる上で参考になることだろう。質問のうちひとつでも「いいえ」の答えがある人は、自分の結婚生活を反省し、伴侶と共に改善の方法を話し合う必要がある。

1. あなたがた夫婦は夫婦のどちらか一方あるいは双方にとって大切な経験をすべて話し合うことができますか。
2. 伴侶に心の思いや感情を正直に打ち明けていますか。時には「寂しい」とか自己の否定的な感情も気楽に言うことができますか。
3. 何かで意見の食い違いが生じても平静でいられますか。互いに攻撃し、非難し合うことなく関心や価値観の相違について話し合うことができますか。
4. 互いに信頼し、尊敬し合っていますか。物事を決定する時は互いの意見を求めますか。たとえ良くないことでも、伴侶は本当のことをあなたに話してくれていると、あなたは信じていますか。



さらに次の5問は、あなたの結婚生活が円滑に営まれているかどうかの目安になるであろう。もし思いあたる点があれば、その問題について伴侶とよく話し合い、必要に応じて監督かカウンセラーに相談するとよい。

1. あなたは結婚生活に退屈し始めていませんか。時々伴侶と一緒にいるのがいやになることはありませんか。
2. 結婚生活や子供たちのこと、あるいは夫婦間の大切な問題で衝突することがありませんか。伴侶に対する不平や批判を他人にもらすことはありませんか。
3. 伴侶に対して否定的な感情を抱き、誤解や無視、あるいは認められていないという気持ちを抱くことはありませんか。
4. 伴侶以外の異性としてしばしば一対一でいることはありませんか。
5. 伴侶以外のだれかに強い愛情を意識したことはありませんか。

伴侶に対して否定的な気持ちを抱き、他のだれかに対してロマンチックな感情を抱くことは貞節が崩れ始めている重大な前兆である。すぐに処置を講じる必要がある。

貞節を守り抜くための第一歩は、まず現実の結婚生活について伴侶と率直に話し合うことである。結婚生活を良くしたいということ率直に真心から話して、いやな気持ちがする人はいないであろう。そうする時に、夫婦が互いに意思の疎通をもっとよく図るようしようとか、一緒にいる時間をもっと多くしようといった方法を検討し合う道も開けるからである。

もしこのような努力を払っても何らの打開策が得られなければ、監督に相談するとよい。監督は何が悪いのか、どうすれば解決できるかを知る助けを与えてくれるはずである。

天父は、私たちがこの地上での結婚生活を

通して進歩するように望んでおられる。来世に行けば弱点は自然に直ってゆくものだと思うって、努力を後回しにすることは正しいことではない。来世にはまた新しい計画と目標があるであろうし、この世で不満足な結婚生活に甘んじることしかできなかった人に、来世のための霊的な備えができていたとは思われなからである。

今日の人々に、主は次のように戒めを与えられた。「汝……姦淫を犯すなかれ。また、人を殺すなかれ。また何事にもこれに類することを為すことなかれ。」(教義と聖約59:6) 不貞と貞節は互いに相容れないものである。貞節、誠実、信頼、そして分かち合いの気持ちが高まれば、それだけ不貞の入り込む余地はなくなる。貞節を保つ上で最も大切なのは、本人の決意である。つまり自分の伴侶に、あるいは制度としてまた個人的な関係としての結婚生活に、さらに福音の理想や標準、また共に力強く永遠に進歩するという考えにどれだけ自分をかけることができるかである。

「何事もよく観察し、心にかけて、努力することが必要である。結婚も例外ではない。結婚生活は無関心でいたり、ぞんざいに考えたり、放っておいたりしてひとりでの改善されるものではない。無関心であれば、現状維持どころか、崩壊を招くしかない。何事にも注意と世話と関心とが必要であり、特に人生のあらゆる関係の中で最も影響を受けやすい結婚という関係においてはなおさらである。」(リチャード・L・エバンズ, *Richard L. Evans Quote Book* 「リチャード・L・エバンズ引用集」p. 16)

(ベオン・G・スミス兄弟は、ユタ大学社会事業学科教授であり、結婚問題、家族問題相談室長を務めている)



季節季節に雨を

デビッド・カール・ダニエルソン

私は人生の一年一年を思う時、その年の出来事が印象深く思い出される。結婚した年、父が亡くなった年、牛舎を新築した年。そして、1977年は私にとって奇跡の年であった。

私はユタ州カッシュ盆地で農業を営んでおり、生活は天候によって大きく左右される。特に、1977年はひどいかんばつであった。それは1976年の秋に例年降るはずの雪が降らないことから始まった。山あいの地で雪のない秋はそうあるものではない。私たちはこの際だと思って畑を耕し、平らにならし、石を拾い、柵を修理した。

しかし1月の終わりになっても一向に雪は降らず、山は地肌をむき出しにしたまま灰色を呈していた。それでいて寒さはことのほか厳しく、一度ほんの少し降った雪がいつまでも地面に薄く残っていた。容易ならぬ事態が起こっていることはだれの目にも明らかであった。

同月、ローガン地区のステーキ部長たちが地区代表のM・A・クジャー兄弟と会合を持ち、特別に断食することを決定した。1月23日の日曜日、ユタ州ハイラムステーキ部の教会員が新しい建物に初めて集まり、クジャー兄弟から断食をすることについて説明を受け、ステーキ部長のガス・リー兄弟が、1月26日の午後6時から断食を始め、翌27日に祈り会を行なう旨を発表した。

それが奇跡の始まりであった。私たちは喜んで断食に加わった。ステーキ部の5割以上の人々が老人から10代の若者まで家族全員で祈り会に出席した。讃美歌を歌い、リースステーキ部長が全員を代表して時が来たならば必要な水を送って下さるように主に祈り求めた。非常に霊的な集会であった。私は主が祈りを聞き届けて下さると確信した。

しかしその夜は雨も雪も降らず、翌週もその気配はなかった。2月に入ると少し暖かく

なって、わずかに残っていた、雪も解けてしまった。私は早速耕した土を掘ってみたが、中はカチカチに固まったままであった。「まだその時ではない」というのが、主の答えであった。しかし、私たちの忍耐は限界に達しており、主のみ旨を理解することは難しいと思うことが時折あった。

2月の半ば、知事はユタ州を特別災害地域に指定した。経済全体が狂ってしまい、多くの冬季観光施設が営業を中止し、営業した所も細々と続けた。また、タイヤ店はスノータイヤの大売出し続きであった。市当局は節水を呼び掛けた。懐疑論者は主に頼る人々をあざけり始め、新聞には、天候を支配するのは神ではなく自然だということがまだ分らないのかという投書を寄せた人もいた。

このような懐疑論者たちの非難をよそに、祈りと断食はずっと続けられていた。私は何度もこの約束を思い出した。「もしあなたがたがわたしの定めに進み、わたしの戒めを守って、これを行うならば、わたしはその季節季節に、雨をあなたがたに与えるであろう。」(レビ26:3-4)

3月になって、私たちの信仰は報われた。待望の雪が何度か降ったのである。それでも3月としては「普通」の積雪でしかなかった。3月の最後の週は空も晴れ、暖かかった。地面はすぐに乾いたので、私たちは畑を耕し、良い苗床を造ることができた。そして3月21、22日の両日に18.5ヘクタールの大麦畑に種まきをし、1週間後には福祉農場の植え付けも終えた。

しかし、再び試練が訪れた。4月になり、そして4月も終わるといふのにほとんど雨らしい雨も降らない。ところが、ステーキ部の四半期大会で、リーステーキ部長はこう約束した。「作物を植えなさい。主は私たちの祈りを聞いて下さいました。」

この時すでに、主要水源地であるポーキュパインダムの貯水量は半分に減少しており、山からの流水はまったくない状態であった。

3月の雨量はわずか15センチか20センチほどで、専門家は、畑作物は全滅で、灌漑設備の整っている所でも5割以上の減収と予測していた。地元の灌漑委員会では夏の灌水制限計画を立てた。それでも私たちは個人的にも公の集会でも祈りを続けた。

5月5日、ついに私たちの祈りはかなえられた。そして、だれもが、それは主のこたえであることを確信した。まるで主が私たちの信仰を試し終えて、信仰を受け入れて下さったかのように、来る日も来る日も雨が青々とした作物に降り注いだのである。そして5月は盆地始まって以来の記録的な雨となり、干し草は今までで最高の収穫を得た。

公式には、この年はかんばつの年と言われ、統計上もその通りであった。しかし雨は古代イスラエルに降ったマナのように、少しも余さずその時に必要なだけ降り注いだ。アルファアルファ(牧草)が育ってくるにつれて、水が足りるだろうかと心配したが、収穫してみるとどれも平年並みか、それ以上であった。

奇跡の時期が終わりに近づいてくるにつれ、納屋は穀物で一杯になった。ステーキ部の福祉農場も始まって以来の豊作を記録し、我が家の畑も大豊作で、納屋や穀倉は一杯になり、心は、はちきれんばかりの喜びで満たされた。

ステーキ部長は9月22日に、ステーキ部の全教会員を集め、主の恵みに感謝の言葉を述べた。そこには前と同じようにステーキ部の全会員の半数ほどの人が集まって、感謝の祈りを捧げた。そして私は、心に安らかな気持ちをもって家路についた。この試練は私の信仰と証を強めてくれた。私は二度と奇跡を疑うことはないと思う。「およそ人何事にも神を怒らせずまたは何事にも神の怒り燃ゆることなし、たゞすべての事の中に神の御手のあることを告白せず、その誠命に従わざる者に神の怒りあり。」(教義と聖約59:21)私ははじめてこの聖句の深い意味が分かったような気がした。

ふと我に返ると、雨がフロントグラスを打っていた。

あの真紅に輝くカリフォルニア州カタリナ島の日没を描き得た画家はまだいない。冬になると、この辺りの海岸線は岸に押し寄せる荒波のうなり声に震え、白い波頭は躍りながら荒れ狂う冬の海原に散ってゆく。

しかし穏やかな天気の日海は一変して空の色と相和し、青紫や青緑、エメラルド色に輝く。名も知らぬ鳥が逆風に乗って空を漂う。ペリカンは餌を求めて泡立つ波の中に飛び込み、灰色の鯨は尾をうち振り、潮を吹き上げる。イルカはまるで子供たちが鬼ごっこをしているように泳ぎ回り、あしかは風に向かって叫ぶ。

活気に満ちた光景で、日によりその様異なる。このような光景をこよなく愛した人にデビッド・O・マッケイ大管長夫妻がいる。大管長夫妻は機会あるごとに南カリフォルニアのこの地を訪れ、しばしの休息を満喫して

いた。ふたりは手を取り合い、何時間も、移り変わってゆく眼下のパノラマに見入っていた。

ある時、私は大管長夫妻を訪問する機会に恵まれた。その日の出来事を、私はつい先日のことのように今でもはっきり覚えている。私たちが海を見ていると、大きなあしかが一面、浅瀬でもがいていた。わき腹は呼吸するたびに大きく波打ち、ついに力尽きてぐったりとなってしまった。

マッケイ大管長はその光景を見て、私に言われた。あのあしかは自分の連れあいと仲間を敵の襲撃から守るために壮烈な闘いをし、見事に撃退した後、傷をいやすか、あるいは安らかに死ぬための場所を捜してここまで来た、と。

私はそれを聞いて驚いた。マッケイ大管長はどうしてそのことを知ったのだろうか。言

大管長の優しさ

フェレン・L・
クリステンセン



業には確信が感じられ、説明もはっきりしていた。

誘われるままに、私たちは海辺に出かけた。するとマッケイ大管長が話された通り、あしかの背中とわき腹の傷口から鬩いの後を物語るかのように多量の血が流れ出ていた。苦しげにやっと息をする以外はまばたきひとつせず、ただじっと横たわっているだけだった。

私はあしかが動かないのにしびれを切らし、石を投げれば水中に帰って行くだらうと思つて石を拾った。そして腕を振りかぶつた時、マッケイ大管長からその腕を押さえられた。大管長は何も口に出して言わなかったが、手の感触から、神の創造物に対して優しくしなければならぬという強い勧告が感じ取られた。

私たちは海岸に下りて行き、つるつるした体のあしかに手を貸してやった。あしかの苦痛を少しでも和らげるように優しい言葉をかけていたマッケイ大管長の姿を、私は今でも忘れることができない。

マッケイ大管長はあしかを少しも怖がらなかつたし、あしかもマッケイ大管長を友達だと思つていたようであつた。そして、出血も止まり、十分に休息したあしかは身を滑らすように水の中に入り、仲間の所へ帰つて行つた。

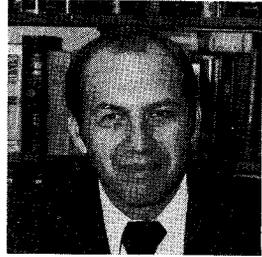
マッケイ大管長の優しさ、美を愛する心、そしてあらゆる生き物に対して抱いている慈愛の気持ちを思い出すたびに、次の聖句が私の心に浮かんでくる。「われ神、大いなる鯨と水の豊に生ずる動くすべての生物とをその種類に従いて創り、また翼のあるすべての鳥をその種類に従いて創りたり。而して、われ神その創りたりしすべての物善しと観たり。」(モーセ2:21)

あの日、宝石のように輝く自然の中で、私は神の予言者からひとつ教訓を学んだのである。全地を治める人間は、親切と愛によって治めなければならない、と。(モーセ2:26参照)

質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

動物は永遠の計画のどこに位置するのでしょうか。



カリフォルニア州バークレー、
インスティテュート指導主事
ジェラルド・E・ジョーンズ

「自然は私たちの心を神に向けさせ、私たちに神の存在を教えてくれる。私たちは神のすべての創造物に対して心からの愛と賞賛の気持ちを抱く必要がある。」デゼレト日曜学校協会中央管理会長会のジョセフ・F・スミス大管長と十二使徒評議員会会員のデビッド・O・マッケイ長老、スティーブン・L・リチャーズ長老の3人は、1918年4月号の『ジュービニル・インストラクター』の論説でこう述べています。彼らは「自然を愛する心は神を愛する心に近い」として、教会員に「人類の利益ばかりにとらわれずあらゆる生き物に思いやりを示すならば、人はもっと容易に神について知ることができる」(p. 183)と述べています。多くの家庭で動物を飼うことの大切さが認識され、その結果子供たちの中に愛と分かち合いの心が芽生えてきています。また、動物の世話をさせることによって子供たちに責任感を植え付けることもできます。

動物がその忠誠心から飼い主の家族を助け

るということがありますが、私たちはその話を聞くと感動せずにはおられません。つい最近も、勇敢な犬が炎上する自動車に窓ガラスを破って飛び込み少女を助け出したという話がありました。

福音の計画の中で動物がどのような位置にあるかということについて多くの質問が寄せられています。その中から幾つかの問題を拾ってみたいと思います。

(動物は霊を持っていますか。復活しますか。)

はい、その通りです。予言者ジョセフ・スミスは動物の永遠の状態について啓示を受けました。その質問に対する答えが教義と聖約第77章に記されています。また、ジョセフ・スミスはある説教で動物の復活について語っています。しかし、その時もそれ以上のことは述べていません。(History of the Church「教会歴史」5: 343参照)

(動物はどの光栄の階級に行くのでしょうか。)

聖典には日の光栄の王国にいる動物について記されているだけで、ほかの王国に行くかどうかは憶測の域を出ません。しかし、ジョセフ・フィールディング・スミス長老は、動物が三種の光栄の王国に分けられることは「大いにあり得る」と語っています。Improvement Era 「インプルーブメント・エラ」1958年1月号、pp. 16—17) 私の知る限り、この問題について語った予言者はほかにいません。

(動物も律法の従順さによって裁かれ、復活するのでしょうか。)

ジョセフ・フィールディング・スミス長老によれば、動物には良心がありません。罪を犯すことも、悔い改めることもできないのです。なぜなら、善悪の知識がないからです。

(Man: His Origin and Destiny「人、その起源と行く末」pp. 204—205)

(動物は来世で飼い主と生活できるのでしょうか。)

このことについては何も啓示されていません。当然のことながら、牧場主や農場主はこの世で所有したすべての家畜と生活したいと

は思わないでしょう。しかし心の結びつきはそのまま継続され、動物が復活してもとの飼い主のもとへ行くという事はあり得ます。オルソン・F・ホイットニー長老は、ジョセフ・スミスが愛馬と永遠に住む日を待ち望んだと記しています。(Improvement Era「インプルーブメント・エラ」1927年8月号、p. 855)
(人間と動物は実際にどのような関係にあるのでしょうか。)

人間は神の子供であり、動物は人間のために存在しています。しかし、そうだからといって、動物に対する責任をなおざりにしてよいということではありません。あらゆる時代の予言者が、動物にも公正と慈悲をもってその扱いに責任を持つように述べています。アルマは家畜の群れについて祈るように勧めています。(アルマ 34: 20, 25 参照) 教会歴史は、動物に油を注いで癒しの儀式を施した例が数多く記されています。中でも有名な話は、メアリー・フィールディング・スミスの牛が癒されて、将来の大管長ジョセフ・F・スミスを交えた開拓者の家族を無事にユタまで運んだという話でしょう。(プレストン・ニブレー、Presidents of the Church「歴代大管長」p. 234 参照)

多くの予言者が、人はこの世で動物を正しく扱わなければならないとしばしば教えています。永遠における動物の状態についてはほとんど語っていません。それよりも人が福音に従い、天父のみもとに帰れるようにふさわしく生活することの大切さの方が強調されています。そうすれば、おのずとそのような疑問も明らかになるからです。冒頭で紹介した論説から再び引用して終わりたいと思います。「創造主をあがめる人は、主が創造されたものを不用意に取り扱うことはしないものである。生き物を愛することは、人によりよい生命への道を開き、神の恵みを必要としている人々の霊性を高めてくれる。」(Juvenile Instructor「ジュニアビニル・インストラクター」1918年4月号、p. 182)



奇跡の朝

マージェリー・S・キャノン

少年ジョセフ・スミスは、真剣なおももちで近くの森に入って行きました。早春の冷気はひんやりとしています。それも、今のジョセフには快いものでした。長い間の苦勞の末に、やっと聖書のヤコブ書から答えを得たからです。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、……神に、願い求めるがよい。そうすれば、与え

られるであろう。」(ヤコブ1:5) ジョセフは、どの教会に入ればよいか神に祈り求めることにしたのです。

ジョセフは、心の中に強くうながされるものを感じて、森の中に入ってきました。

そして、ある場所に着くと、しばらく声をひそめてあたりを見回しました。ひとりになって天父と話をしたかった

からです。朝日が木の間からさし込む
1820年の早春の朝、14歳の少年ジョセフ・スマスは、ひとり森の中でひざまずいて、神に祈りました。

祈り始めるとすぐに、ジョセフは暗い、重苦しいものに取り囲まれ、息苦しくなりました。恐れが全身を走りました。そこでジョセフは必死に祈りました。けれども、何かの力に捕らえられ、話すこともできなくなってしまいました。その時、ジョセフはこのまま死んでしまうのではないかと思いました。

それでもジョセフは力を振りしぼって、敵の力から逃れようとして祈りました。天父に助けを求めたのです。

すると突然、あたりが明るくなり、敵の力から解き放たれました。そして真上に、太陽よりも輝く、明るい光を見たのでした。その光の柱は、天から少しずつおりてきました。初め、ジョセフは木の枝が燃えているのではと思ったほどでした。それから、光が頭上にとどまった時、ジョセフは言葉では言い尽くせない喜びを感じたのでし

た。

その光の柱の中に、ふたりの御方が立っておられました。

そして、ひとりがジョセフの名を呼んで、もうひとりの御方をさして、言われました。「こはわが愛子なり、彼に聞け。」

その御二方は、ほかならぬ天父とイエス・キリストでした。ジョセフは天父とイエス・キリストの持つておられる輝きと力に圧倒され、敬虔な気持ちになり、何も言えませんでした。

また驚いたことに、天父は私たちと同じ姿をしていらっしやいました。これまで牧師たちが教えていた電気や磁気のような御方ではありません。私たちと同じように話もなさいます。このように神はジョセフに現われ、ジョセフの祈りにこたえて下さいました。ジョセフはその時、まさに神はこの地上のすべての人々を愛しておられることを確信したのです。

それからジョセフは、神にたずねました。「すべての教派(教会)の中どれが正しいですか。またどの教会に入

「だったらよいでしょうか。」

するとイエスが、すべての教会は間違って^{ちが}いるので、どの教会にも加わって^まはならないと答えられました。それから救い主は、^{きょうかい}ジョセフにいろいろなことを教えて^{おし}くださいました。どれくらい^{じかん}の時間がたつかわかりませんが、やがてふたりの御方が去り、^{おかた}光の柱が消えて^きしまいました。

気が付くと、^あジョセフは天を見上げて、^むあお向けに横たわっていました。^{ちから}ジョセフは、しばらく力なく横たわって^{こころ}いましたが、心は喜びでいっぱいでした。

ジョセフはやっとの思いで立ち上がると、^{いえ}家に向かって歩き出しました。この特別な出来事のために、^{からだ}体は疲れて^{れい}いましたが、^{そらたか}霊は空高く飛ぶ鳥のように^{かろ}軽やかでした。

まったく予想しない祈りのこたえで^しました。

ジョセフの前に^{まえ}光の柱がおりてきて、その光の中に^{ひかり}天父とイエス・キリストが立^たっておられ、^{かた}ジョセフに語られたのです。そのことが、^{さい}わずか14歳の少

年^{ねん}に起^{おこ}ったのです。ジョセフはもう一度目^{いちどめ}をとじ、^{ふか}深く息をすいました。そして、^でさきほどの出来事を思い出しました。すると、^{こころ}心は再び、^{あい}愛と^{へいあん}平安に包^{つつ}まれ、^{おかた}ふたりの御方にお会^あした出来事^でがはつきりとよみがえって^ききました。天父とイエス・キリストに、自分の^{ぶん}父母以上の愛^{ふぼいじょう}を感じ^あている自分^{じぶん}に^{おどろ}驚きを感じ^{かん}じたほどでした。

家^{いえ}に帰^{かえ}り、^{だんろ}暖炉にもたれかかっていると、^{はは}母はジョセフを抱^だきよせて言^いいました。「ジョセフ、^かどうかしたの。どこか^{からだ}体でも悪^{わる}いの？」

「うん、^いだいじょうぶ」と言^いって、^{いっしゆん}ジョセフは一瞬、^{ことば}ことばにつまりました。みなさんなら、^{もり}ジョセフがけさ森の中で^{なか}経験^{けいけん}したことを、^{かあ}お母さんにどう説明^{せつめい}しますか。天父と救い主^{すくぬし}が^{えいこう}栄光をもって^{あら}現^{あら}われ、^{しんり}真理を告^つげられたこと、そして^{こころ}心の中^{なか}にあふれんばかりの^{あい}愛と^{よろこ}喜びを感じ^{かん}じたことをどう言^いい表^{あら}わしたらよいでしょうか。

ジョセフはお母さんに「^{いま}今、^{ちじょう}地上にある^{きょうは}教派^{ただ}がどれも正^{ただ}しくないことを知^しらされました」と答^{こた}えたのでした。

メアリーの信仰



けれども、もうすぐソルトトレックです。

もうすぐだよ



その夜は、山のふもとでとまりました。



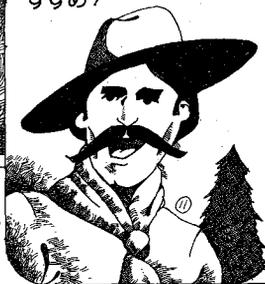
朝おきてみると、みんなは、メアリーたちをおいて さきにしゅっぱつしていました。いじわるな たいちょうがメアリーたちをおいて行ったのです。



すると、きゆうに黒い雲が出てきました。



すすめ!



あらしになり、牛たちはげ出しました。



あらしがしずまると、メアリーたちはしゅっぱつしました。



さあ、出かけましょう

このようにして、メアリーたちは、いじわるな たいちょうたちよりもはやく、ソルトトレックにつくことができました。



ジョセフ・エフ・スミスだいかんちょうのお母さんが、このメアリー・フィールディング・スミスです。



あなたが幸せなら

キム・ロダー

近^{きん}所の^{じよ}こどもたちの中^{なか}で、初等^{しよとうきようかい}協会^{かい}に行^いっていないのは、私^{わたし}だけでした。お父^{とう}さんは末日^{まつじつ}聖徒^{せいと}でしたが、活^{かつ}発^{ぱつ}ではありませんでした。お母^{かあ}さんはちがう教会^{きようかい}に行^いっていました。

5さいのころ、私^{わたし}はみんなの中^{なか}に入^{はい}っていけなくて悲^{かな}しいおもいをしたことがあります。お友^{とも}だちは初等^{しよとうきようかい}協会^{かい}にさそってくれたのですが、お母^{かあ}さんがゆるしてくれませんでした。

でも、とうとうお母^{かあ}さんからゆるしがでたのです。それからは、毎^{まい}週^{しゅう}、初等^{しよとうきようかい}協会^{かい}に出^い席^{せき}しました。そして家^{かえ}に帰^{かえ}ると、初等^{しよとうきようかい}協会^{かい}で習^{なら}ったことをいつも話^{はな}しました。お母^{かあ}さんもそれを楽し^{たの}しみ

にしていたようです。

私^{わたし}のお友^{とも}だちにローラという子^こがいました。ローラのお母^{かあ}さんは、私^{わたし}のお母^{かあ}さんにいつも親^{しん}切^{せつ}にしてくださっていました。そしてよくモルモン^{はなし}の話^{はなし}をしていました。お母^{かあ}さんも教会^{きようかい}に関^{かん}心^{しん}



ができてきたようでしたが、今行っている教会をやめることができませんでした。もしそうすれば、きっとおばあさんが悲しむだろうと思ったからです。

いつものようにローラのお母さんと話をして帰ってきたお母さんは、ある日、私に言いました。「もうローラのお母さんとはお話ししないことにするわ。いつもきまって教会の話になるんですもの。」

でも、それも3日とつづきませんでした。結局、ローラの家に出かけて行ったお母さんは、その晩はじめて宣教師を家によぶことにさんせいしてくれました。

お母さんはレッスンを受けて、モルモン経を読むようになりました。そして、自分がどうすべきか祈りました。まもなく、お母さんはバプテスマを受ける決心をしました。でも、おばあさんにどう話したらよいかわかりません。



お母さんはありったけの勇気をふりしぼって、おばあさんに電話をかけました。そして、バプテスマを受けて、末日聖徒イエス・キリスト教会に入ることを知らせました。

おばあさんは何も言いませんでした。ただひと言、「ほんとうに悲しいことです。おまえには、失望しましたよ」と言って、受話器をガチャンとおいてしまいました。

それから長い間、手紙を出しても、電話をかけてもおばあさんからはなんの返事ありませんでした。そんなある日、おばあさんから電話がかかってきました。そのときのお母さんの喜びようったらありません。「これまでずっと、おまえのバプテスマについて考えていました。でも今、はっきりとわかりました。おまえが、幸せになるなら、それが一番いいってね。」

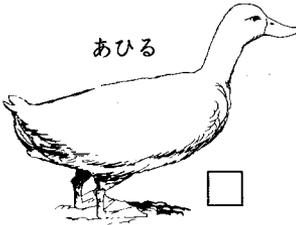
私は、8さいになってバプテスマを受けました。つづいて、弟もバプテスマを受けました。でも、お父さんはいっこうに教会に行く気ありませんでした。あるとき、弟がお父さんに言いました。「お父さんとお母さんは、どうして神殿で結婚しないの。」お父さんはしばらく考えていたようです。

そして、間もなくその日がやってこようとしています。

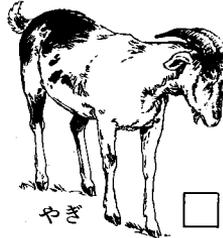
どのどうぶつのか あしあとかな？



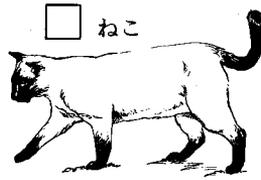
あしあとをみて、どのどうぶつもの
かあててください。 そのばんごうを□
のなかにかきましょう。



あひる



やぎ



ねこ

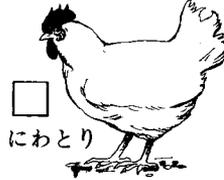


うさぎ

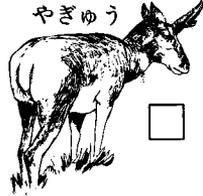


きつね

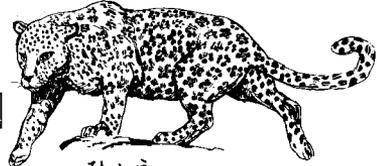
やぎゅう



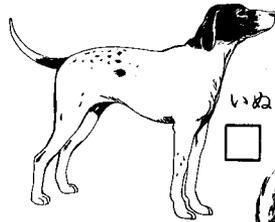
にわとり



おおとかげ

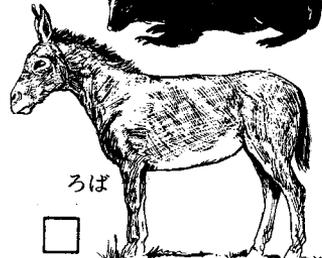


ひょう



いぬ

すかんく



ろば



1



7



2



8



3



9



4



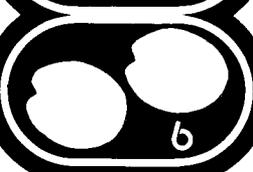
10



5



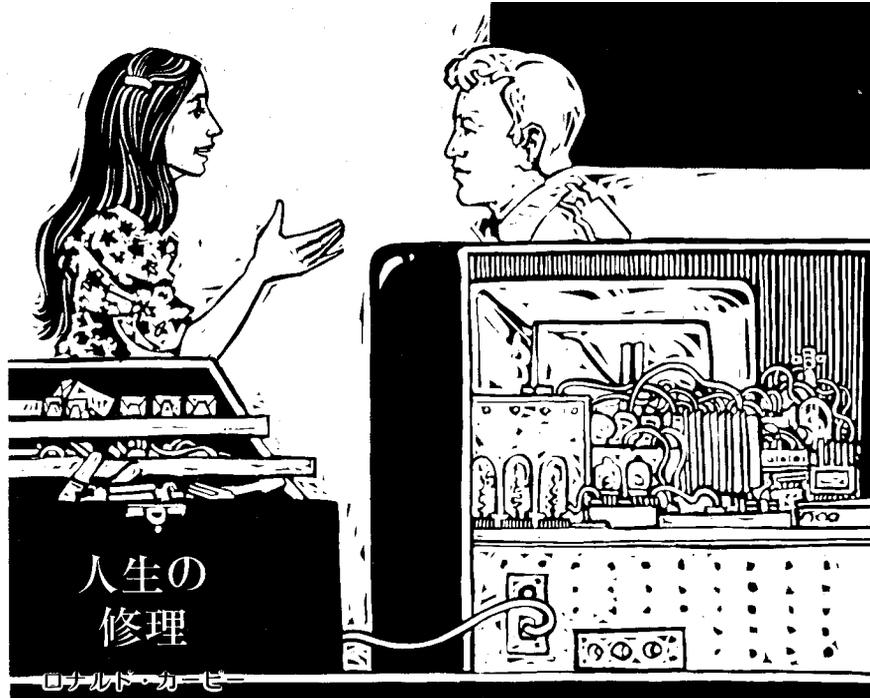
11



6



12



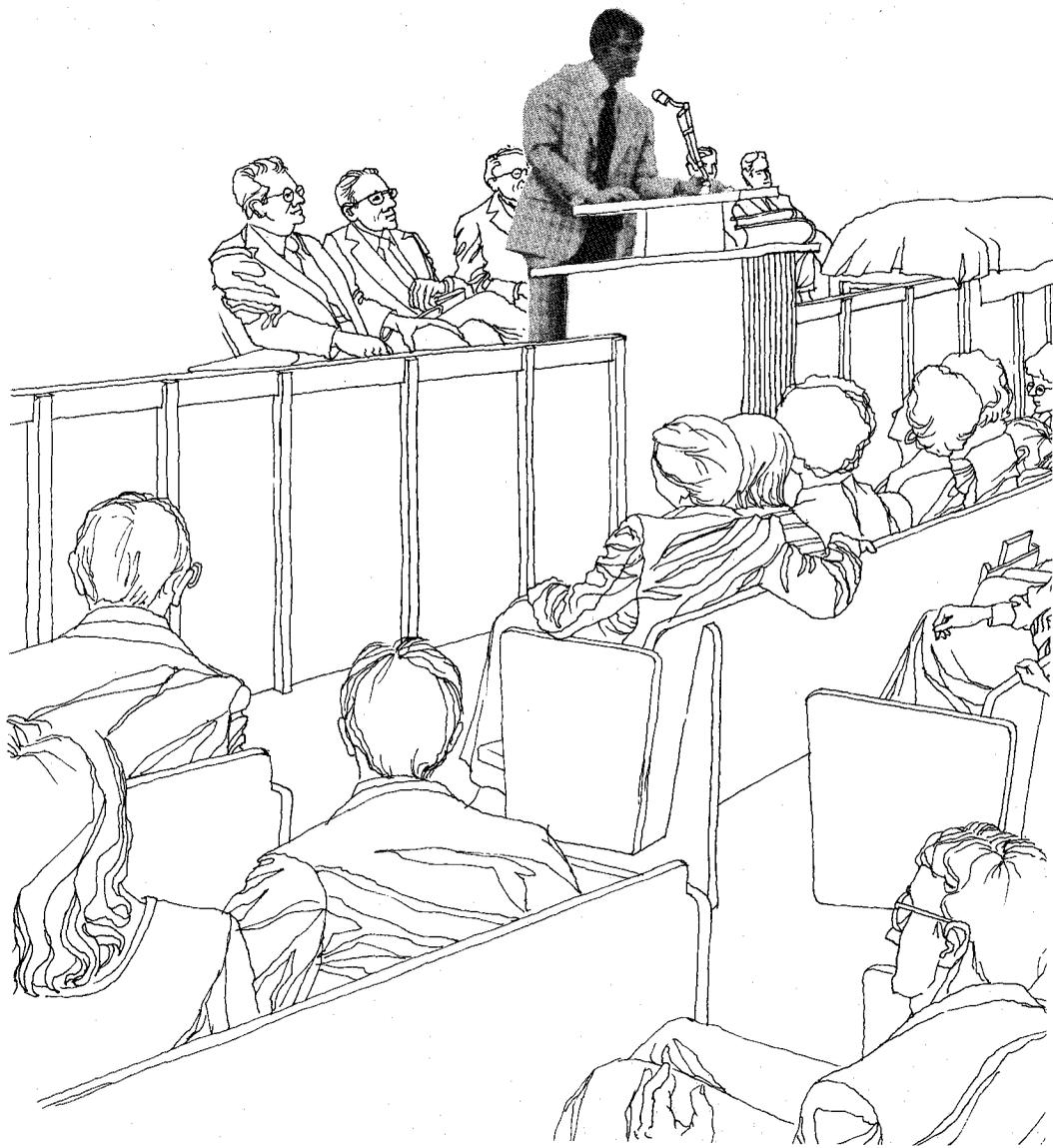
ある日私が遅れて職場に行くと、同僚のテレビ修理工は皆出払った後でした。15分ほどして電話が鳴り、私は近くのアパートまでテレビの修理に行くことになりました。目差す家はすぐに見付かりました。18歳くらいのクリスチーナという名の女性が応待に出て、私をテレビのある部屋に通してくれました。話をしながら修理をしていると、「何か飲み物でも」と彼女が勧めてくれたので、紅茶を一杯とお願いすると、「あいにく私は紅茶を飲みませんので」という返事でした。私はその理由を尋ねると、彼女は逆に私に、「『モルモン』について御存じですか。知りたいと思いませんか」と尋ねてきました。それから彼女は、ジョセフ・スミスの話や彼女の行っている教会について話してくれました。私は彼女の話に興味を覚えました。彼女は、末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の教会であることを証しました。彼女のように強烈に私の心を捕

え、しかも時間を割いて私に関心を示してくれた人は、それまでひとりとしていませんでした。彼女はまた、日曜日に教会の集会に出席するように誘ってくれました。テレビの修理はほんの2、3分で済みましたが、彼女とは6時間近くも話し込んでしまいました。私にとっては驚くべきことでした。その日から、テレビの修理よりもはるかに貴重な「人生の修理」が始まったのです。

私が初めて教会に行った日曜日はちょうど断食証会が開かれ、私は教会員の方々から心の込めた温かな歓迎を受けました。その日は私にとって忘れ得ぬ日となりました。クリスチーナはさらに、私を宣教師に紹介してくれました。このようにして、イギリスのボルトンに住むひとりの優しい女性の勇気ある行動と証がきっかけで、私は2週間後にバプテスマを受けることができたのです。

ある聖餐会での話

アニヤ・ペイトマン



「**深**呼吸をしてご覧なさい。」教会への途中、母親からこう言われていた。そこで彼は深呼吸をした。もう一度彼は息を深く吸い込み、それから吐き出そうとした。

「どうしてこんなに臆病おそひょうなんだろう。そんなことない。そんなはずがあるものか。落ち着かなくちゃ。」彼はせわしくモルモン経をいじっていたが、その聖典の中から紙切れを取り出した。そして折り目が破れないようにそれをそっと広げた。

「兄弟姉妹の皆さん、ここでお話できることを心から感謝しています。」ありきたりの出だしである。彼はその紙をたたむと、ポケットに押し込んだ。しかしすぐにそれを取り出すと、またモルモン経にはさんだ。

それから、ハンカチを取り出して手をふいた。どうしても震えが止まらない。とにかく

体の震えを止めなければならない。そうしないと声まで震えてしまう。

「兄弟姉妹の皆さん、きょうこうして皆さんの前に立ってお話できることを感謝しています。この機会が与えられたことを感謝しています。監督である父から話をするように言われ、……」そうじゃない。どうしてもっと上手に話せないのだろう。

以前に話をしたのは、今から3年前だった。まる3年間、人前で話したことがない。とにかく何かと理由をつけてはこの責任から逃れ続けてきた。しかしあの時の記憶も時とともに薄れてきたし、今度ばかりは人々の前に立って話がしたいと思った。そして引き受けた。けれども、いざ引き受けてみると、あの苦々しい記憶がよみがえってくる。あの時はあがってしまって何も言えなかった。今でもその時の話をよく覚えている。あの時、みんなの顔を見た途端に、覚えていたはずの話をすっかり忘れてしまった。一瞬、頭が空っぽになった。彼は考えた。「けれどもあの時は、原稿を用意していなかった。あれがいけなかったんだ。頭のいいところを見せようと思って話の原稿を用意しなかった。だってお父さんは原稿なんか使ったことない。でもきょうは原稿があるから心配ない。」何も心配いらぬはずなのに、どうしても不安でたまらないのだろう。

父親は発表事項を伝え、ジャックから少し離れた席に着くと、せき払いをした。ジャックは自分とよく似た父の横顔を見詰めてつぶやいた。「でも似ているのは顔だけなんだ。お父さんの話はとても力強い。」父の話はいつも経験談が多く、内容が豊かだった。「それに比べると「僕の話は大したことはない。みんな居眠りするだろうなあ。でも、それならそれでいいんだ。」

父はジャックの視線を感じたのか、彼の方を向くとにっこり笑ってうなずいた。ジャックも笑い返し、唾を飲み込んで原稿を取り出した。「お父さんみたいだったら、こんな思いをしなくてもすむのに……。」そう考えながら、



こぶしをしっかりと握りしめた。「でも別にお父さんのように話す必要なんてないんだ。迫力がなくなっただけいい。とにかくカ一杯話せばいいんだ。」

ジャックは頭を垂れて、額の汗をぬぐった。めがねが汗のためにくもっていた。その時、ジャックの心にふとある考えが浮んできて、彼はろうばいした。彼はつま先を靴の底に押し付けた。「今僕が泣き出したらどうだろう。もしここで取り乱して泣いたら、どうなるだろう。思いきって泣けばいいじゃないか。いや、そんなことはできない。断じてしてはならない。兄弟姉妹の皆さん、きょう……。」話し終えるまでに8分半かかる。8分半の間なら耐えられるだろう。「途中、一度や二度、声が上がることがあるかもしれない。しかし泣いたりはいしない。」少なくともそう願っていた。

カールソン姉妹の指揮で聖餐の讃美歌が始まった。ジャックは慌てて讃美歌集を開いてページをめくった。けれども、うっかりしていて讃美歌の番号を聞き逃がしたため、どのページか分からない。索引を調べ、歌っている讃美歌のページを開いた時には、もう終わりに近かった。どうも声がいつもと違う。言葉ははっきりしないし、声量もない。それに、かすれ声で上ずっている。「声が出ない。どうして話せばいいだろう。」ジャックは一度せき払いをして歌ってみた。すると幾分声が出るようになり、ほっとした。

「知恵の言葉に従うことは大切です……」話の言葉が頭の中を駆け巡った。それも話の筋に関係なく、頭の中は混乱していた。彼は讃美歌を少し歌ってから、大きく息を吸った。

聖餐式が終わると、父はプログラムに目を通し、彼にはほほえみかけて説教台の方へ歩いて行った。「いよいよ僕の番だ。」ジャックはとっさにそう思った。「お父さんはこれから話し手を紹介して、僕が最初に話をする。あと8分半ほど辛抱すればそれで済む。」父親の低く、張りのある声が礼拝堂中に響き渡った。父は力強く、迫力のある話し手だ。会員たち

は皆じっと父を見ていた。ジャックも、人々のそのような視線を浴びながら立たなければならぬ。何となく息苦しく胸をしめつけられるように感じた。心臓発作かもしれない。

「みんなの前に立つことはできない。僕にはできない。たとえ立ち上がったとしても、そのまま立っていられるかどうか。気分が悪くなりそうだ。話せないってお父さんに言おう。いや、だめだ。やっぱり話さなくちゃ。どうしても話をしなければ。」ジャックの頭の中は混乱していた。先程までの自信はどこへ行ってしまったのだろう。けさ、鏡の前で一言も間違わずに話の練習ができたではないか。身振り、手振りまで入れて、素晴らしい話が出来たのに。

「兄弟姉妹の皆さん、今晚都合があって、エミリー兄弟姉妹にお願ひしていた話をうかがえなくなりました。お話をお願いしたことで、エミリー姉妹の仕事が増えたからではないでしょうが、ともあれ、小さな霊がその家族に来たくてたまらなかつたようです。今、エミリー姉妹が病院に入ったという知らせを受けました。」みんながどっと笑った。しかし、ジャックには笑っている余裕などなかつた。それから父親はジャックの方を振り向いて、彼に笑いかけた。「そういうわけで、きょうは息子のジャックに話したいだけ話してもらいたいと思っています。息子もきつとうれしいことでしょう。」笑い声が再び礼拝堂に響いた。ジャックは顔がカッカとしてくるのを感じた。話のことに気を取られていて、エミリー夫妻がいなくてさえ気付かなかつたのである。

「でも、話すのは8分半だけだ。」

「ここで、お集まりの皆さんに少しお話したいと思います。」父は続けた。「息子の話の前に、最初私が考えていることについて少しお話したいと思います。それは神権についてです……。」父親は堂々たる態度で片手を説教台に乗せ、もう一方の手をポケットに突っ込んだ姿勢で話していた。

ジャックは頭をかかえこんだ。「まさか、こ

んなことになるとは。父親の後で話すなんて、まったく予期しなかったことだ。もう僕にはできない。」ジャックは心の中で叫んでいた。それにしても何を話しているのだろうか。

「私たちの家族には神権を使い、その召しを全力を尽くして遂行している人がいます。彼は幼い頃から、神権の力を信じていました。」ジャックは父親が自分のことを言っていることを知って、少し恥ずかしくなった。「ジャックは、ある時特別な経験をしました。それは私たち家族にとっても大切な経験でした。そのことについてお話したいと思います。それは、……」

父親があまり長い間黙っているので、ジャックは顔を上げて見た。すると父親は両手で説教台をしっかりと握りしめていた。

「それは……。」

「お父さん、お願いだからその話はしないで。最後まで話せないに決まっているよ。」ジャックは、やきもきした。ジャックはその話をよく知っていた。それはジャックが自動車事故に遭い、父親の祝福で命を取り留めたという話である。それにしても、父はこれまで決して人前でこの話をしようとしなかったのに、なぜ今になって話そうというのだろうか。

「息子が3歳の時でした。その3歳の息子が私に、祝福をして欲しいと言ったのです。」ミラー監督の声は上ずり、指は青ざめていた。長い間、沈黙が続いた。「すみません。この話はしない方がよいのかもしれません。でも私は……。」それから2度ほど話をしようとしたが、そのたびに涙が込み上げてきて、言葉にならなかった。「すみません。……その時、医者是这样言いました。……」父は黙って立ちつくしていた。声を押さえることもできなくなっていた。ジャックは父のすぐ後ろに腰掛け、椅子のひじ掛けを握りしめていた。「お父さんを助けなくちゃ。」ジャックの頭の中はその思いで一杯だった。

するとどうしたことかジャックの気持ちは一転して平静さを取り戻した。ジャックはす

っとと立ち上がると、説教台の方へ歩いた。そして父の背に腕を回して言った。「監督、いいえ、お父さん。続きを僕に話させて下さい。」父は驚いて息子さんの方を振り返った。めがねの下からは涙がほおを伝わっていた父はようやく落ち着きを取り戻し、大きくうなずいて席についた。

ジャックはどうしてその話をする勇気が出たのか自分にも理解できなかった。しかし、話を終えるころには、会員たちの中に涙をふいている人もいた。さて、いよいよ今度はジャックの話の番である。どこで何を話したらよいのだろうか。いまさら知恵の言葉について話すのもおかしい。彼はモルモン経を開いて話の原稿を見ていた。その時、モルモン経の中に線の引いてある聖句が目に入った。「私すなわちニーファイは善い父母から生まれたので……。」(Iニーファイ1:1)ジャックはこれだと思い、大きな声でその聖句を読み上げた。そして会員たちの顔をしっかりと見詰めた。ジャクソン姉妹やワイド家族、彼らのホームティーチャーのプライス兄弟もいる。そのほか、スミス家やジャクソン家の人々、それに自分の家族の者、母親も。ジャックはもう夢中になっていた。何とかして、自分の思いを伝えたいと思っていた。

「実のところ、父が監督であることにこれまで少し不満を感じていました。けれどもみんな父に大きな期待を寄せています。そこで今、私ジャック・ミラーは、善い両親の下に生まれた者として、私の父のように、神権を尊び、隣人を愛する人を父親に持つことに伴う祝福についてお話したいと思います。」後ろを振り返ってみると、父が大声で笑っていた。「先程父が私のことについて話しましたので、今度は私が父のことを話したいと思います。」みんながどっと笑った。後ろで、父が声を上げて笑っているのが聞こえた。

彼は堂々と話し続けた。彼の力強い声が礼拝堂に響き渡った。こうしてジャック・ミラーは主のみたまに満たされて、立派に話をしたのである。

勝利と 悲劇

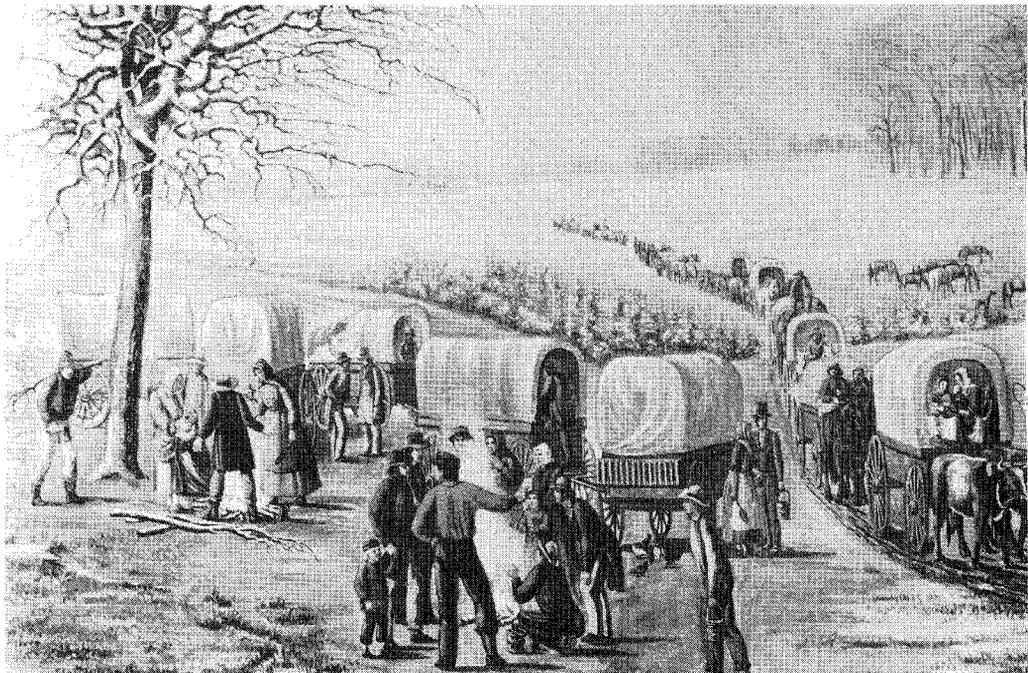
1833—39年

グレン・M・レオナード

1830年代の後半、末日聖徒はオハイオ州カートランドにおいて数々の霊的な祝福を味わった。しかし同時に、厳しい信仰の試しをも受けたのである。1836年3月27日のカートランド神殿献堂に伴い、末日聖徒は5年前にニューヨーク州を離れた時以来約束されていた霊的な力を授かった。聖徒たちは多大の犠牲を払ってこの神権時代初の主の宮居を建てたものの、オハイオ州と第2の集合地であるミズーリ州北部では度重なる厳しい苦難のために教会の一致は脅かされていた。

カートランドは、1831年の啓示によって、わずか5年間の一時的な本拠地とされていた。(教義と聖約38:32; 64:21参照) そのため、多くの会員たちはその地にとどまるようにというチャレンジを快く受け入れたのであった。カートランドにおいても、ミズーリ州ジャクソン郡においても、聖徒たちは、聖徒以外の開拓者や州民たちから土地を購入した。カー

ノーヴェーへの移住



トランドで、聖徒たちは乾燥食品店や宿屋、製粉所、工場などを経営した。このようにして、末日聖徒は進んで地域社会の発展に奇与しようと努力してきた。

しかし、以前からその地に住む人々は、急増するモルモン移住者を見て、カートランドの経済の均衡を揺るがすとして恐れを抱いた。その上、末日聖徒の日常の政治活動にも不審の目を向けるようになった。数人の末日聖徒が選挙に勝った時など、モルモンはアメリカ政府に反対して秘密の独裁政治を行なおうとしているといううわさまで流れた。このようなことは、いつの日か福千年の統治が行なわれることを信じている末日聖徒に対する恐れからくるものであった。聖徒たちは地域社会の問題にも関与し、カートランドではジョーガ郡の議席の設置や禁酒運動をはじめ数々の問題の審議に加わった。

政治や社会問題に対する関心に加えて、末

日聖徒の教育に傾ける熱意は、カートランドのどの人々よりも勝っていた。1832年12月に下された「^{かんらん}橄欖（オリーブ）の葉」として知られている啓示（教義と聖約第88章参照）の中で、主は神殿を建てるようにと大管長会に命じられた。この神殿は後に建てられた数々の末日聖徒の神殿とは異なり、礼拝や教育のためにも使われるものであった。2階の部屋で塾が開かれ、伝道に出る人々の訓練と一般の学問の研究が行なわれた。

「予言者の塾」（「長老の塾」とも呼ばれた）という宗教講座が始まったのは、神殿が完成する前の1833年のことで、これはその後数年間にわたって断続的に行なわれた。この講座は、予言者ジョセフ・スミスや他の人々が準備した「信仰講話」に基づいて進められた。教義に関するこれらの講話は、1835年から1920年にかけて、「教義と聖約」に付加して出版されている。カートランド学校と呼ばれた一般学問の部には、算数や文法、地理などの学科があった。1835年にはヘブル語のクラスが設けられ、オハイオ州ハドソンのヨシュア・セイカスがこれを教えた。1837年の秋に神殿が献堂されてからは、カートランド高等学校が、「カートランド学校」の教育過程を採り入れて一般教育に当たった。

カートランド神殿の建てられた目的は、教育のほかにも幾つかあった。それは、「天よりの能力を授けん」（教義と聖約38：32）と言われた主の約束を、ふさわしい聖徒たちのために成就させることであった。「^{かんらん}橄欖の葉」の啓示には、この特別な建物は「祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家」（教義と聖約88：119）となることが述べられている。



神殿は、大管長会に与えられた啓示に基づいて、フレデリック・G・ウィリアムズが設計した。カートランド神殿は、外形的には当時ニューイングランドにあったある大きな教会堂に似ていたが、末日聖徒の建物として非常に珍しい特徴が随所に見られる。例えば、集会室の両端には、腕のいい職人によって刻まれた見事な教壇がすえられていた。教壇は4段になっていて、西の教壇はメルケゼデク神権、東の教壇はアロン神権のために使われた。幅約17メートル、奥行約20メートルのこの部屋は、必要に応じて幕で4つに仕切られるようにロープと滑車を取り付けてあった。

神殿のすみ石は1833年7月23日にすえられ、間もなく会員たちの協力を得て建築が開始された。この工事により、すべての人に犠牲と経済的負担が求められた。砂岩を採石する者や石工、大工、さし物師、ガラス職人、塗装工など現場で働く人々、建築に携わる人々の衣類をまかなうために紡績や織物に従事した女性たち、そのほか総工費6万ドルの費用を納めてくれた人々など犠牲は計り知れない。この聖なる建物の完成間近に、各家庭からガラス製品や陶器が寄贈された。それは細かく砕いてしゅくに混ぜ、神殿の外装に利用された。これは神殿の輝きを添えるのに役立った。

1836年3月の神殿献堂にまつわる出来事は、カートランドにおける教会史上最も霊的なものである。ジョセフ・スミスは献堂の準備を進めるに当たって、洗足の儀式と灌油の儀式について神権指導者に教えた。これは、「汝ら……備えと聖めとをなすべし。誠に、われの汝らを清浄にせんため、わが前に汝らの心を潔め、また汝らの手と汝らの足を清めよ。

かくて、われは汝らがこの悪しき世の血によりて汚れざることを……わが神に証をなし……」(教義と聖約88:74—75)という主の戒めを守るものである。これらふたつの儀式は、数年後ノーヴーで予言者ジョセフ・スミスによって紹介された完全なエンダウメントの儀式への備えとなるものである。

3月27日の献堂式には大勢の人が詰め掛けた。そのため、啓示によって与えられた献堂の祈りを何回か繰り返し、全員がその祈りを聴けるようにした。この集会で、ウィリアム・W・フェルプス作詞の讃美歌「主のみたまは火のごと燃え」が初めて歌われた。その夜、神権者たちが集会を開いていると、神殿が風のような音に包まれ、そこに出席していた者の何人かが異言を語った。神殿の外にいた者はその時風の吹きぬけるような音がし、神殿の塔の上に一条の光がさしていた、と述べている。会員たちはさながらペンテコステの日のような霊の^{ひんげん}顕現を体験したのだった。

それから数日後の4月3日の日曜日に、驚くべきことが起こった。午後の集会で聖餐を受けた後、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリは西側の教壇に退き、周囲の幕を下ろした。そしてふたりはそこにひざまずいて、沈黙の祈りを捧げた。すると示現が開け、ふたりは「教壇の^{きょうらん}胸欄に立ちたもう主」を見たのである。(教義と聖約110:2) 救い主はこの神殿を受け入れたまい、数々の祝福を約束された。その後さらに3つの示現が続いて開かれた。そして、モーセからイスラエルの集合の鍵、エライヤスから「アブラハムの福音の神権時代」の鍵、エライジャから「先祖の心に子らを思わせ、子らの心に先祖を思わせ」る鍵がふたりに託されたのである。(教義と聖約

その日の出来事と献堂式の行なわれたその週の出来事は、聖徒たちがカートランドを去り、この神殿が他の者の手に落ちてからも、長く聖徒たちの心に刻まれていたことだろう。長い間放置されていたこの神殿は、ミズーリ州インデペンデンスに本拠をおく復元イエスキリスト教会の所有となり、現在集会所として使用されている。

カートランドでの危機

ジョセフ・スミスがカートランドを離れる原因となった苦難は、ミズーリ州の聖徒たちをジャクソン郡からクレイ郡に(1833年)、さらに北部の郡へと追いやった暴徒たちの時とはやや趣を異にするものであった。当時、政治的、宗教的圧力がミズーリとオハイオの両州を襲っていた。しかし、カートランドでの緊迫はおもに、ジョセフ・スミスが金融の仕事に従事し、卑劣な背教者たちの脅威にさらされていたことに起因している。

カートランドでもオハイオでも、この時代の経済成長には目を見張るものがあつた。辺境の地の住民にはお金も不足していたし、お金を借りる信用もなかった。人口が増え、事業が盛んになり、地価が暴騰するにつれ、末日聖徒の経営者たちは、負債を支払い、インフレ経済を刺激するために、銀行券を印刷し、回転させる銀行が必要となった。そこで1836年11月2日、ジョセフ・スミスたちは「カートランド安全協会」という銀行を設立し、州議会に認可を申請した。このような目的で過去8年間のうちに、合衆国内で400もの新しい銀行が設立されていた。しかし、オハイオ州の首都コロンブスにまで持っていかれたこ

の申請は、金融勢力に反対する力が強まっていたこともあって、州議会から却下されてしまった。そこで申請者たちは共同で株式会社を創立し、株式を売り出して資本金を集めることにした。彼らはこれを「カートランド安全協会非銀行会社」と呼び、すでに印刷済みの銀行券にその名称を付加した。

1837年1月にカートランド銀行券が出回り始め、一定量のお金で裏付けられると、人々はそれを額面通りに受け入れるようになった。そして、この銀行券を商品の購入や負債の返済に充てた。しかし、1カ月も経たないうちに、協会は銀行券と金貨の兌換を中断することを余儀なくされた。金の需要が供給を上回り、他の地域の銀行は地元でしか償還できない紙幣ではどうしようもないと考え、カートランド銀行券の受け入れを拒否するようになったのである。その上、合衆国全体が経済恐慌に突入し、数百に及ぶ銀行が閉鎖されたことも相まって協会はますます危機に陥った。

ジョセフ・スミスは、1837年の夏近くになって、カートランド安全協会の出納係を辞職した。その後数カ月して、会社は倒産した。こうして予言者は、多額の負債を抱えることになった。土地に投資し、商品はみな掛けで買い込んでいた。しかし、借金の返済に充てようにも、品物が売れなかった。

友人たちの中には、予言者としてのジョセフ・スミスと、事業家としての彼の役割を混同して考える人々がいた。ジョセフ・スミスも他の人々と同じように、その日の生活の糧を得るのに追われた。けれどもこのような仕事上の失敗も、宗教指導者としての予言者の忠実さに影響を及ぼすことはなかった。にもかかわらず、カートランドのある住民たちは

彼に冷たく、教会の大管長の職からおろす計画まで練ったのである。人々は徒党を組んで彼が予言者であることに反対を唱えた。このようにして背教した人々ゆえに、予言者の生命だけでなく、支持者の生命も危なくなってきた。そこで公然と人々の前で予言者を弁護していたブリガム・ヤングと他の聖徒たちは、敵の襲撃と暗殺から予言者を守るために、カートランドを出ることにした。

教会の指導者たちは、冬の寒さの中をミズーリ州へと向かい、1838年の早春にファーウェストに到着した。その地の教会員は家畜やお金を出し合って彼らを助けた。夏が来る頃には、カートランドにとどまっていた忠実な会員たちも、ミズーリ州の聖徒たちに合流することを決心した。このようにしてカートランドの陣営と呼ばれた500人を越える人々の一団が、七十人の指示の下に、幌馬車でファーウェストへと向かった。そして彼らはアダム・オンダイ・アーマンの地に住みついた。

苦しい生活も、教会の発展を妨げはしなかった。合衆国東部の各地で伝道活動が成功し、カナダでの改宗は、福音が大西洋を越える日

が間近いことを示していた。1836年4月、十二使徒評議員会のパーレー・P・ブラット長老がカナダを訪れ、トロント地域で福音を宣べ伝えた。その地で彼は、原始キリスト教会の回復を待ち望んでいたひとりのメソジスト教会の牧師、ジョン・テイラーに出会った。このようにして、後の第3代大管長ジョン・テイラーは、3週間の求道者生活を終えて、妻と共にバプテスマを受けた。その後2年足らずで、彼は十二使徒のひとりに召されたのである。

カナダで改宗した新しい会員たちには、英国に多くの親戚や友人たちがいた。そこで彼らは自分の改宗談を手紙に書き、友人たちに証を述べた。福音を宣べ伝える素地はすでに出来上がっていた。ジョセフ・スミスはカートランドを離れる数カ月前に、ヒーバー・C・キンボール、オルソン・ハイド、ウイラード・リチャーズ、そのほか4名のカナダ人改宗者を召して、英国での伝道を開始させた。彼らがリバプールの港に降り立ったのは、1837年7月20日のことである。

宣教師たちはまず、親戚や友人たちを訪れ、



ハウンにおける迫害

それから一般の英国人の中に入っていった。教会や貸ホール、その他訪問先の家々で福音を宣べ伝え、9カ月後には、約2,000人の改宗者を得たのである。翌年の春に、宣教師たちは、カナダ人のジョセフ・フィールディングに伝道部の管理を任せて帰国の途に就いた。この時、副伝道部長にはウイラード・リチャーズ（まだ使徒に召されていない）と、英国人改宗者のウイリアム・クレイトンが召された。

ミズーリ州における苦難

もしもジョセフ・スミスがミズーリ州の北部の聖徒たちの間で平和に暮らすことを望んでいたとしたら、多分非常に落胆したことだろう。ここでもカートランドと同様に、誤解と不和がうず巻き、論争が起こった。1838年の春、ステーキ部長会（デビッド・ホイットマー、W・W・フェルプス、ジョン・ホイットマー）が不実であるという訴えが評議会の調査の結果確認され、彼らはその職から解任された。代わって、ステーキ部長にトーマス・B・マーシュ、副ステーキ部長にブリガム・ヤングとデビッド・W・パッテンが召された。ほとんど時を同じくして、教会法廷は、モルモン経の3人の見証者のうちのオリヴァ・カウドリとデビッド・ホイットマー、十二使徒のライマン・E・ジョンソンを破門にしている。彼らは、カートランドの反対者たちに同調して、ジョセフ・スミスを公然と非難したからである。

1838年の夏、ミズーリ州の住民たちは、聖徒たちへの攻撃を再開し、中には暴力行為に出る者もあった。予言者はこのような脅迫に立ち向かうことを決心し、必要であれば、戦

闘をも辞さない覚悟であった。シドニー・リグドンは、1838年7月4日、アメリカ独立記念日の演説で、その決意の模様を詳しくうたいあげた。「我々はもはやこれ以上の我慢はできません。権利を踏みにじるようなことをしていて、何で罰せられないことがありましようか。……暴徒たちは我々を襲い、我々を苦しめ続けています。これは恐らく掃討戦になるでしょう。……我々は今後も侵略者となることはないし、いかなる人民の権利をも侵害しません。しかし、自己の権利を守るためには死をも恐れず立ち向かうつもりです。我々が要求しているのは我々の権利です。すべての人が各自の権利を保つことを我々は支持します。」(BYU Studies「BYU 紀要」1974年夏, p. 527)

ミズーリ州の住民たちは、この演説こそ、モルモンが「反逆者」であることの証拠であるときめつけた。その結果、「1838年モルモン戦争」と呼ばれている暴力事件が起こったのである。発端は、デービュス郡ガラチンの選挙日での出来事であった。その日、酔っぱらったひとりの市民が、反モルモン主義の候補者に反対投票した聖徒にけんかを仕掛けてきた。しかもそのけんかの模様が誇張されてファーウェストに届いた。そこで、ジョセフ・スミスたちは武装した隊を組織して兄弟たちの救助に向かった。途中、アダム・オンガイ・アーマンでライマン・ワイトから負傷者が少数であることを知らされ、一応事態は收拾されたものと思った。ところが、間もなくしてジョセフ・スミスとライマン・ワイトは反逆罪に問われ、逮捕されて裁判にかけられることになった。

今やうわさはうわさをよび、モルモン蜂起

の偽りの報告がミズーリ州知事リルバーン・W・ボッグズのもとに届いた。そこで彼は、州兵に命じてそれを阻止しようとした。一方末日聖徒もコールドウェル郡の州兵の自衛軍に登録されていた。キャロル郡からきた暴徒がデウィットの聖徒たちを襲撃したことを聞いて、ジョセフ・スミスは会員たちにそこを離れるように勧告した。そのことは、あちこちで暴徒たちの行動にますます拍車をかけた。アダム・オンダイ・アーマンの近くでは、夜の闇に乗じて侵入した暴徒が家屋や干し草を焼き払った。そのため、州兵の司令官はライマン・ホワイトに、モルモン自衛軍を組織するように指示した。

10月24日、サムエル・ボガート大尉に率いられたコールドウェル郡の州兵の一団が、3人の末日聖徒を捕虜にして連れ去り、残りの者には州から退去するように命じた。十二使徒のひとりであったデビッド・W・パッテン大尉は捕虜を救出するために末日聖徒の州兵の小隊を率いてクルックド川付近に野営しているボガート軍に攻撃をかけた。これら両方の州兵の戦いは互角で、パッテン大尉とほかにも3名の死者が出た。

この衝突の様子は非常にゆがめられてボッグズ知事に知らされた。聖徒たちは町を焼き払い、住民を追放し、『ダナイト団』という秘密結社をつくって公共の権利を揺るがそうとしているというのである。そこでボッグズ知事は、末日聖徒の意見を聴くこともなく、10月27日に州軍のジョン・B・クラーク將軍に命令を出した。「もしも一般民衆の治安のために必要ならば、モルモン教徒を敵として取り扱い、撲滅するか、本州より追放すること。モルモン教徒の無法な行動は筆紙に尽くし難

迫害と追放

この悪名高い「撲滅令」は、予想通りの結果を招いた。10月30日、200人ほどの州兵が、コールドウェル郡、ヤコブ・ハウンの工場近くにある30軒ほどの末日聖徒の居住地を襲撃し、大虐殺を行なった。彼ら末日聖徒は、わずか2日前に州兵の指揮官と平和条約を結んでいたのである。それにもかかわらず、州兵たちはモルモン教徒を攻撃し、17人を殺した。その中には、かじ屋に難を逃れていた少年たちも含まれていた。

翌31日、ファーウェストでは、教会の指導者たちが一堂に会して、サムエル・ルーカス將軍から出された4項目にわたる要求に耳を傾けていた。末日聖徒の財産は損害賠償として没収する。末日聖徒の指導者は降服して裁判を受け、処罰を受ける。残りの者は武装を解除し、州兵の保護の下に州から退去する。このようにして、ジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、ライマン・ホワイト、パーレー・P・ブラット、ジョージ・W・ロビンソン、ハイラム・スミス、アマサ・ライマンが捕らえられた。その間も、州兵はファーウェスト一帯を荒し回っていた。すぐに軍法会議が開かれ、捕虜は翌朝銃殺されることになった。そして、ルーカス將軍はアレクサンダー・ドニファン將軍に刑の執行を命じた。以前に聖徒たちの弁護士を務めたことのあるドニファン將軍は、その時、次のような返事を將軍に書き送った。「それは残忍な殺人です。小官は閣下の命令には従いません。わが隊は、明朝8時、リバティーに向かいます。もし閣下がこ

れらの人々に刑を執行されるなら、神に誓って法廷の前に閣下の責任を問う覚悟であります。」(History of the Church「教会歴史」1:482)このドニファン將軍の勇氣によって、刑の執行だけは取りやめになった。

1838年の11月と12月、ミズーリ州は平静であった。しかし聖徒たちは、いつかは家を捨てなければならない時がくると思っていた。ジョセフ・スミスと副管長たちが捕虜となっていたので、十二使徒評議員会の先任会長ブリガム・ヤングはミズーリ州を立ち去る準備を始めた。委員会が組織され、1月までに行程の調査が行なわれた。そして2月に、ブリガム・ヤングはファーウェストを出た。その後本格的な退去が始まり、4月下旬までには、聖徒たちのほとんど全員がミズーリを脱出したのである。その大半がミシシッピ川を渡り、イリノイ州西部のクインシーに避難した。そのほか、セントルイスやその周辺に逃れた聖徒たちもいた。

聖徒たちが苦難の退去をしている間も、予言者と他の捕虜たちは獄中で悶々たる日々を送っていた。彼らは、ミズーリ州のインデペンデンスからリッチモンドに護送され、反逆罪で裁判にかけられる日を待っていた。裁判は、オースチン・A・キング判事の下で11月13日から始まった。教会を背教した Sampson・アバードなど数名の証人が立って、予言者が「ダナイト団」という秘密結社をつくって活動していることを告発した。一方、弁護側の証人たちは全員逮捕され、投獄されて、出廷することができなかった。その結果、判事は彼らを大陪審に付すことを決定した。

そのまま数名がリッチモンドに拘留され、ジョセフ・スミス、ハイラム・スミス、ライ

マン・ホワイト、アレキサンダー・マクレイ、カレブ・ホルドウィンは、クレイ郡リバティーの獄に送られた。

石と丸太で造られた約7メートル平方の小きなリバティーの牢獄で、予言者は5カ月間ほど暮らした。しかしこの陰うつな獄から送られてくる予言者の手紙は、驚くほど明るい内容であった。予言者は、祈りと瞑想の日々を過ごし、大切な啓示や考えを幾つも手紙で書き送ってきた。それらを抜粋してまとめたものが、教義と聖約の第121章、122章、そして123章である。

4月になると、リバティーの獄に捕われていた聖徒たちはデービス郡ガラチンに移された。そして、コロンビアへ再び護送される途中、保安官や護衛官たちの手で解放された。疲れ切った聖徒たちは歩いたり、馬に乗ったりしてイリノイ州に入り、4月22日に家族や聖徒たちと再会した。また、リッチモンドに投獄されていた聖徒たちも、7月4日にコロンビアに護送される途中で脱走した。

ミズーリ州からの退去は、教会歴史の中の重要な一時期の終わりを告げる出来事であった。このオハイオ、ミズーリ時代を特徴づけるとすれば、神殿、教義に関する新しい啓示、伝道活動の進展、シオンの中心地の指定を挙げることができる。またこの時代は、経済的な打撃を被り、厳しい迫害と背教にあえぎ、聖徒たちがミズーリ州から退去した時でもあった。しかし、1839年の夜明けと共に、教会歴史の中の新しい時代、新しい活力と成長の時代を、聖徒たちはイリノイ州ノーウーの集合の地で迎えるのである。

新しい命の水を得た喜び

日本名古屋ステーク部

名東付属支部

右衛門佐 重雄

私たちは、今年（1978年）の5月3日にバプテスマを受け、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に加えていただきました。きょう、このステーク部大会で証をする機会を与えていただき、深く感謝しています。

4月7日の夕方、グリーンウッド長老とスカウソン長老の訪問を受けました。これは末日聖徒イエス・キリスト教会から福音を伝えられた3回目のことです。と申しますのは、昨年（1977年）5月に、スティーブンス長老とアイバソン長老の訪問を受け、数回にわたって教えを聞いたことがあったからです。そしてその時いただいた教会のパンフレットやモルモン経、特に、最後の部分のモロナイ書を読んでいましたので、少しは教会のことも知っておりました。

私は、高等学校と大学の時お世話になった家が熱心なカトリック信者でしたので、日曜日にはよく教会に行き、家での朝夕のお祈りをともにしていました。また私たちの子供ふたりはカトリックの大学で学び、神父さまと

も親しくさせていただいていました。私もここ数年、いつとはなく聖書を読んで人生の支えを得ていました。病気の時はお祈りをし、悩みのある時は家内とふたりで新約聖書や詩篇などを読ませていただいております。

グリーンウッド長老たちが来られた時、私たちは精神的にも肉体的にも大変疲労していました。遠く離れた田舎の父が3月末に亡く



名大研究室での右衛門佐兄弟

なり、後に残った母に孝養を尽くせないことや、弟夫婦との問題などで心を痛めておりました。その上私の体も不調をきわめておりました。長老たちの訪問を受けた時、「私は聖書によってキリストを信じている。キリスト教会はどの教会も同じであると思っている。近い将来どこかの教会でバプテスマを受けたいと思っている」と申し上げました。グリーンウッド長老は信仰に満ちた言葉で、この教会が神さまの真の教会であることを証されました。そこで私たちは4月9日に教会を訪問することを約束しました。その日初めて教会を訪ねた時、皆様に温かく迎えていただき、讃美歌に感涙いたしました。それから、武田兄弟姉妹に同席していただき、バプテスマの

ためのレッスンを受け、5月3日大庭兄弟とともにバプテスマを受けました。

その後6カ月ほどたちましたが、精神的な苦悩や病気からすっかり解放され、本当に自由と平安を得ています。私は風邪をひきますと、激しい頭痛におそわれますが、今はそのようなことがなくなりました。病気のため、責任のある会議や研究会や授業の務めを果たせないことが大変な悩みでしたが、このような悩みから解放されたことは私には何よりの祝福と、感謝の気持ちで一杯です。主は「われはよみがえりなり、命なり」と言われました。いつも新しい命の水をいただいて元気で過ごしていきたいと思っています。兄弟姉妹には今後よろしく指導して下さいます。喜びに満ちて毎日を過ごしていることをイエス・キリストのみ名によって証させていただきます。アーメン。



右衛門佐姉妹（自宅にて）

以上の証と次ページの証は昨年11月26日（日）名古屋ステークス大会において話されたものです。なお、右衛門佐兄弟は理学博士。現在、名古屋大学教授として、理学部物理学教室で教鞭を執っています。教会は、日本名古屋ステークス部名古屋第4ワード部名東付属支部で日曜学校副会長の責任にあります。

大きな恵みに 感謝の日々

右衛門佐 照

きょう、このステーキ部大会において証で
きますことを深く感謝いたします。

主人の故郷は田舎で、昔ながらの仕来り（しきたり）を
重んじる所でした。そんな中で、私は長男の嫁
として生活していかなければなりませんで
した。しかも病気がちな主人を助けて行くのは
大変な苦勞でした。その上私も病気にかかり、
子供は發育不良のような状態になる始末で
した。主人は、結婚後7年余り欠勤がちな日々
を送っていました。その頃のことを思えば、
今こうしてふたりが元気な姿で、ここに立っ
ていることが不思議なくらいです。ことに主
人は結婚前から胃潰瘍で、胃痛を訴えない日
はありませんでした。そして、昭和38年12月、
学会の会場で講演中に倒れ、2度ほど大きな
吐血をしました。幸い手術をしていただいて、
九死に一生を得たのでした。その後、胃痛か
らは解放されましたが、今度は過勞や風邪の
時、激しい頭痛がおこり、悩まされ続けてき
ました。私たちの人生はこのような病気と仕
事との戦いの30年余りでした。そのような中
で子供たちは成長しました。昨春（1977年）
次男が、お父さんにはお母さんがいるので、自
分は年老いた田舎の祖父母の面倒をみると言
って、私たちの代わりに故郷に職を得て、家に
帰ってくれました。その時、祖父母は非常に
喜んでくれましたが、田舎の家の後継ぎの間

題が起こり、次男はその家を出ることになり
ました。そして主人の弟夫婦に家を渡し、老
父母の世話を頼むことになりました。そうこ
うしているうちに、祖父は風邪がもとで、こ
の3月に亡くなりました。残された祖母のこ
とで、私たちには大変心勞がつのっていました。
ちょうどそんな頃、4月7日の夜、グリ
ーンウッド長老とスカウソン長老が私たちの
家を訪れて下さいました。奇しくもその日は
主人の次男が学徒出陣で出征し、満州の延吉
収容所で戦病死した33回目の命日だったので
す。

私たちは4月9日、教会を訪問させていた
だきました。そして5月1日には田舎の祖母
を家に迎え、5月3日にバプテスマを受けさ
せていただきました。

それから半年余りたった今、主人も私も健
康に恵まれ、田舎の家の問題も解決し、84歳に
なった祖母とも楽しく元気に暮らせるよう
になりました。次男も祖母を助けてくれています。

主人は晩年になって初めて、健康と自由を
いただき、忙しさの中にも充実した仕事を行
ない、何の妨げもなく、学問一筋に打ち込め
るようになって参りました。この大きな恵み
を神に深く感謝いたします。これらをすべて
イエス・キリストのみ名により証させていた
だきます。アーメン。

神殿サービスセンター

系図活動の進展に拍車をかける

「神殿は儀式を行なうための名前の入手、処理をすべて自分の神殿地区内でまかなうことができるように」という教会系図活動における新たな第一歩を踏み出す準備が、今、3つの神殿地区で着々と進められています。

この系図活動の中心となるのが、「神殿サービスセンター」です。昨年10月に献堂式を終えたブラジルのサンパウロ、そして現在、神殿建設中の東京、また近い将来、神殿の建設が予定されているメキシコ・シティに、新たにこの「神殿サービスセンター」が開設され、その活動が開始されました。

東京の「神殿サービスセンター」は、建設中の神殿を一望のもとに眺めることのできるアジア地域管理事務局の3階にあります。現在、9名の職員が勤務し、教会員から提出された「家族の記録」を検査処理して、その記

録上の死者に神殿で正しく救いの儀式を施せるように手続きをとっています。

福音を聞く機会がなくこの世を去った死者がひとりでも多く、霊界で福音を受け入れ、救いの儀式にあずかることができるように準備することが、センターの職員の願いです。

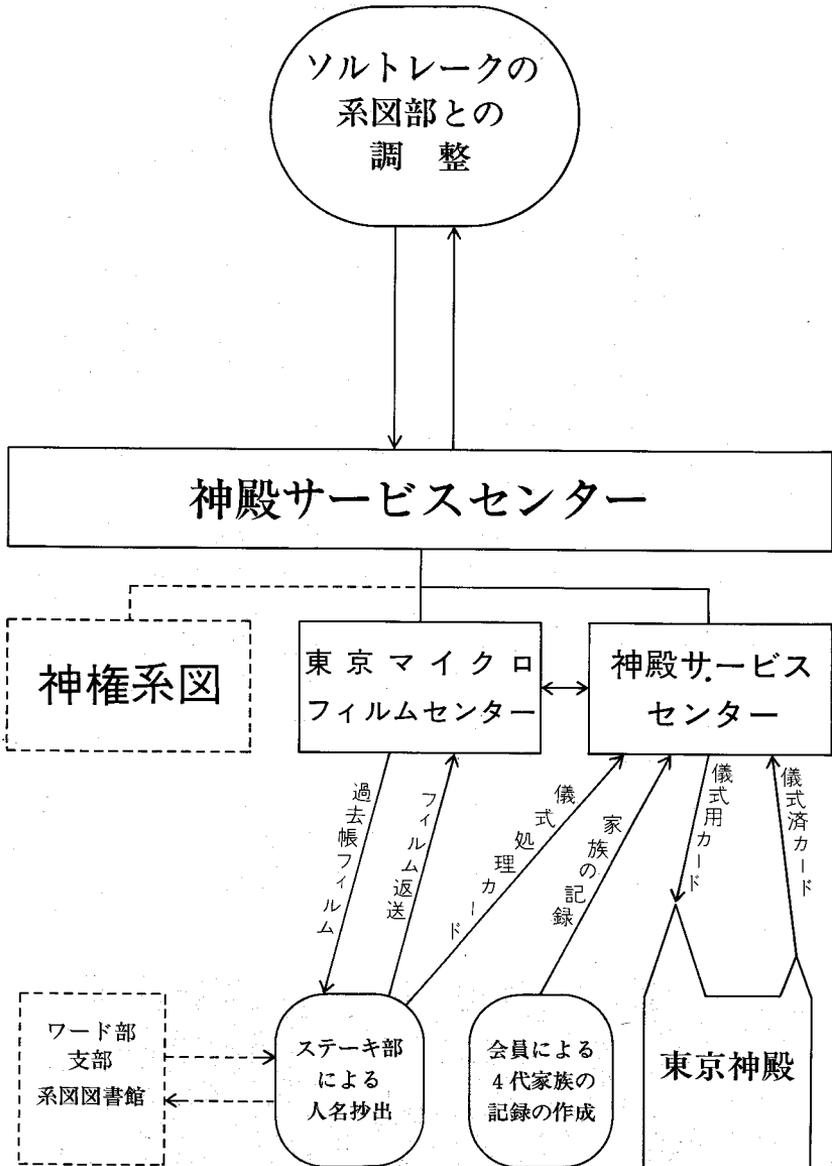
今年は4代（自分を1代として両親、祖父母、曾祖父母までの代とその子孫たち）家族の記録プログラムと、新しく紹介された過去帳による「人名抄出プログラム」の充実に重点が置かれています。「人名抄出プログラム」については、神権系統を通して詳しく紹介される予定です。

次ページの図は、教会員から提出された系図が、どのような流れで処理されるかを図式化したものです。



神殿サービスセンターで働く兄弟姉妹

〈系図部組織の関連図〉



系図に関することご質問があれば、どのようなことでも、右あてに問い合わせして下さい。

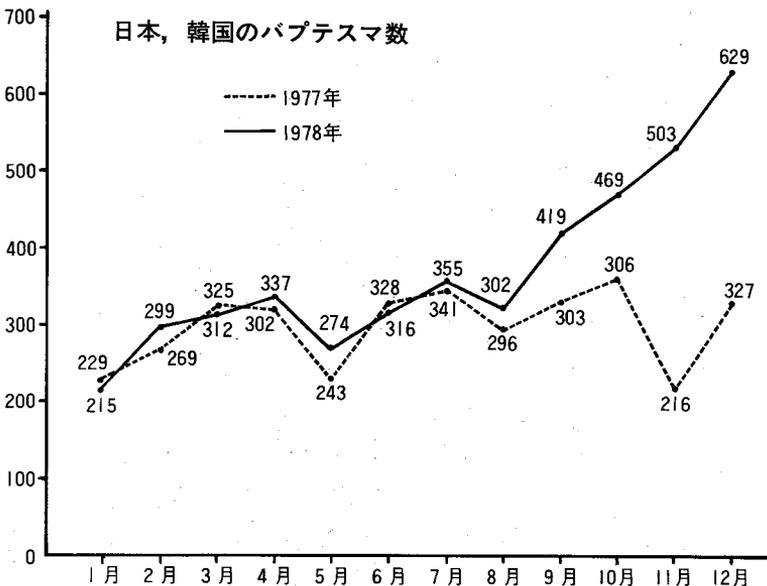
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
 末日聖徒イエス・キリスト教会
 神殿サービスセンター

Tel. 03 (440) 2351 (代表)

伝道部長セミナー開かれる

去る2月9日、前回のステーキ部長セミナーに引き続き、七十人第一定員会会員菊地良彦長老管理の下に、日本、韓国の伝道部長が一堂に会し、伝道部長セミナーが開かれました。特に、今回は、1979年度の伝道計画とその達成方法について熱心な話し合いが行なわれました。

下の写真は、東京神殿建設現場を訪れた菊地長老および各伝道部長御夫妻。



すなわ教会堂

高崎支部

所在地

群馬県高崎市並榎町275

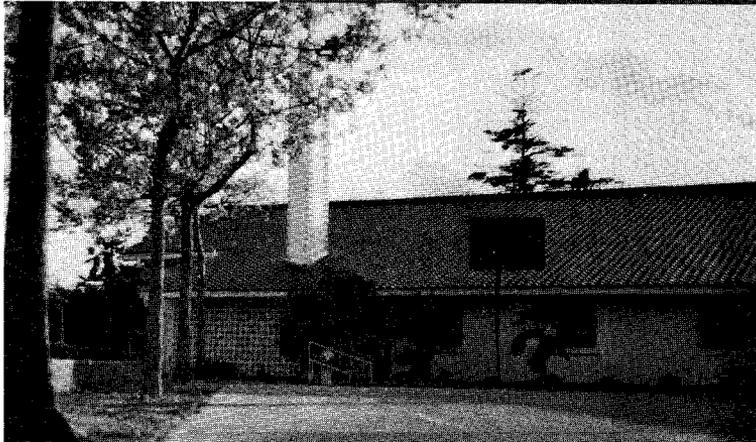
完成

1966年4月

献堂

1966年10月

(マリオン・D・ハンクス長老)



全国SAPサマーキャンプ開催決まる！

来る8月8—11日の4日間、群馬県尾瀬において全国SAPサマーキャンプが開かれることになりました。

全国の若人の積極的な参加を期待しております。なお、くわしいことは追ってご連絡いたします。

期日：8月8日(水)—11日(土)

場所：群馬県尾瀬戸倉温泉

実行委員会委員長 川崎 康 夫 (日本東京北ステーク部
東京第7ワード部)
副委員長 中村 吉 博 (日本東京ステーク部
東京第1ワード部)
" 牟田口 宣 孝 (日本横浜ステーク部
横浜第1ワード部)

訂正

3月号に以下の誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

p.21 右段の上から13行目「忘れ」→「志さ」



靈感と個人の備え

ポール・H・ダン

一般に教会で働く人々を、その準備の状態に従って分けるとすれば、次の3つのグループが考えられる。

第1は、自分には責任を果たすのに必要な知能と才能がすべて具わっていると考えている人々。このような人々は準備をする時に神の導きを求めようとしない。

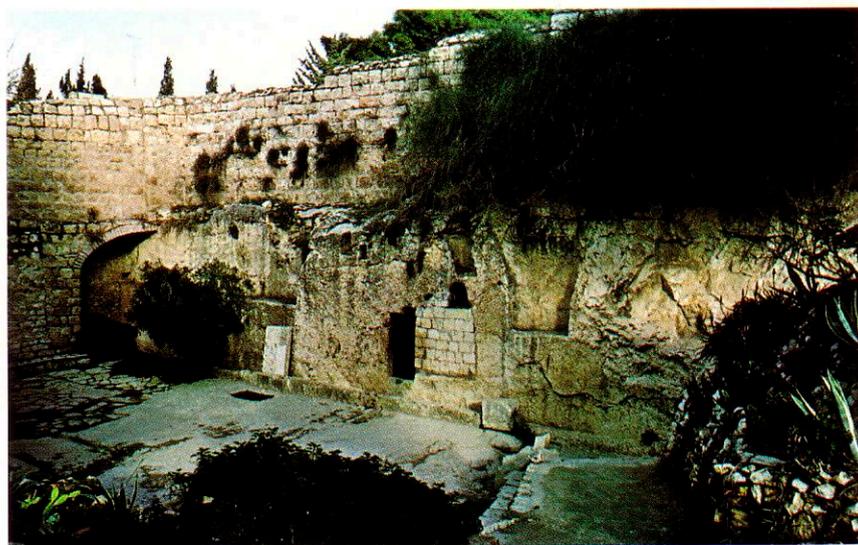
第2に、すべてを主にゆだねる人々。普通このような人々はその時の衝動に頼り過ぎるために、それを靈感と取り違えることがよくある。彼らは問題の解決をすべて主にゆだね、ひたすら主の助けを願い、期待している。

しかし、どちらも正しいとは言えない。前者は自信過剰型である。確かに、人が具えておくべき資質を高めることはできるかもしれないが、助けの必要性を意識しないので、主のみたまを受ける機会がない。

後者は、完全な依存型である。これは、最も賞賛に値すべき神の特質を身に付けることはできる。しかし、自分はふさわしくない、自分にはできないと思いつけているために、自分自身の進歩成長を図る機会がない。

第3のグループは理想的で、神との個人的な関係を維持していける人々である。このような人々は、自分の能力や才能を重んじている。と同時に、自分の能力を発揮するために主のみたまが必要なことを十分認識している。次のような話をよく耳にする。ふたりの者が集まり、そのうちのひとりが主であれば何でもできる、と。

主と共に働く指導者は、奉仕の召しを引き受ける時、自分が召されたのは自分の仕事を行なうためではなく、自分の働きを通して神を助けるためであるということを知るようになるであろう。



「もうここにはおられない。……よみがえられたのである。
さあ、イエスが納められていた場所をごらんください。」

(マタイ28:6)

夜明けの光を受けたエルサレム（写真上）

エルサレムの「園の墓」（写真下と右）